明治十八年初刊

女學雜誌

毎月廿五日發兌

第四百八號

社説
天佑を感知するの長

評論
形神論◉博愛社の事業◉丁汝昌自殺の辨

随感
小橋君を憶ふ◉遠離のおもひ◉只だ信ぜよ◉傳道は傳心にあり◉慕ふものこそ厭ふなれ◉人力車夫◉山路の電信線◉四面白雪◉松を花さして

女學
順良の妻は良人之をつくる◉食時會話の説◉子供のはなし◉女子の本分を讀む

爛煥
女生文學に就ての所感（愛軒）◉夕日影（花影子）◉女の天職（白衣）◉誰れかいふ◉折にふれて◉戀◉憫なる乙女心◉御國の兵士（空花）

開書
日本の姉妹に訴ふ（外國婦人數名）

片々
源綱紀未亡人◉婦人新報新に出づ◉一葉女史◉愛の沈默◉産婆西尾京子◉全國醫師の數◉一藝に達するもの皆道あり◉統計學の名家杉亨二君◉宗教的の情死◉日本の家庭◉最も有効なるは下等婦人◉金玉均未亡人遭難日記◉朝鮮婦人日本に來る勇ありや◉熊本市の高等小學女生◉世界一週の自轉車婦人◉蠶を朝鮮に養はんとす◉東京感化院女子部◉女性の文學◉埼玉縣下の存娼論◉女かみゆひ◉朝鮮婦人の交際◉東黨に女丈夫あり◉女子不就學の原因◉歌舞伎新報◉漢城新報◉一年間吾少女の研究◉英國女王がビーコンスフヒールドを酷信せし所以◉万國幼兒保護會◉子供の研究◉平安女學院

明治二十八年三月二十五日發兌

前號目次

社説 大國民の氣字

評論 當年の紀元節◎翁の樵三が妻（意外のめうと、心中の夫婦）◎日本基督教の第二期

女學 女學に於ける姑◎一教師の日記◎女學統計（教科用書。師範女生の寄宿舍。男女共學の得失）◎日本の黄禍（廣島に於ける看護婦）◎女房の某へ答

隨感 地に屬ける幸福◎死者枕頭の歎◎信ずと云へる情の義

爛煥 朝の空の小鳥のしらべ（蹊花）◎血涙文字（二則）◎米國ハリス夫人の寄書

片々 皇后陛下の御保護◎高等女學校規程◎大日本海外教育會長◎外山先生の神代女性◎基督教青年會寄宿舍◎明治女學校英學教師◎朝鮮王妃の居動言行◎救世軍元帥ブース氏◎女子に適する軍歌◎高等女學校を增設す◎俗吟寧ろ眞情を寫す◎九州評論の流水庵子◎「世光」雜誌亦有詩人◎井上前文部女子教育◎ウイラード女史◎在廣島病院看護婦◎神戸外國婦人慈善會◎瑞西の女子教育近況◎甲州郡內婦女の勤勉◎阿波技藝女學校設置◎高知縣下丹陵婦人會◎小樽婦人慈善會設立◎秋田婦人學會の近況◎レザー、コンクルトンの開書◎世界婦人禁酒會頭の召集◎裁縫教授細目

前々號目次

社説 帝國將來の警語（國粹發揮にあり）

女學 本年女學界の標的（勤儉にあり）◎勤勉の鍛練◎儉約の刺激◎家庭叢書を評す◎女學界の躰育論◎冬の夜の話しがたき◎家政おぼえ書（泥棒を憫れむ◎太閤の旋巾）◎神代の女性

隨感 明暗模糊の境◎無名氏を景慕す◎乙女の贊◎劇中の殿樣◎太平の武者修行◎佳人大丈夫◎口耳の學

評論 無神なし性惡なきの辨◎觀時獨嘯（春にして春ならず春ならずして常久の春○學士博士に物問はん○文士の不動明王○問はん哉、問はん哉○才子滿朝○多事は無事にあらず○義戰の內助紡糸にあり○新聞帋）◎我邦の基督教問題◎日清軍記◎大日本膨脹論◎年首の歎の聲◎雪嶺、佛徒に檄す◎西鄉隆盛傳◎新井白石◎太陽◎帝國文學◎少年世界

爛煥 「さびしい」とは何ぞや（布川無識庵）◎さこしへの春、しぐれ女）◎須磨の浦に昔を懐ふ（花影子）◎をみなへし（同）◎なき友を思ひて（同）◎三五の月（好木時文）◎新の栞（白衣）

片々 西園寺文部大臣の女學論◎淸國皇太后◎大隈伯北堂◎橫井小楠夫人◎公務に於ける婦女の活動◎女子高等師範學校撰科◎田村鴨村◎佐々城豊壽女史◎熊本縣の女子教育◎印度の婚風大家◎孤女學院特別資本

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずとて院長は太たく心を痛めらるる由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歳に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんとを祈る。之が爲めに定むる所の憲法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名げて孤女學院特別資金と云ふ。

二　此資金は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業（最初は養蠶）に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四　收益の二分五厘を以て孤女の貸銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

巖本善治　石井ちか
小鹿島筆　加藤とし
田村武治　津田むめ
名出保太郎　小島きよ
古在とよ　靑木まさ
平野はま　杉浦義道

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

稅所篤子女史序文

米國大博覽會日本婦人會編

日本の婦人

全一冊 洋裝 密畫入

定價金五拾錢 郵稅六錢

本書は一昨年閣龍世界大博覽會の米國シカゴ府に開せらるに方り我貴婦人中畏くも皇后陛下の御保護を奉戴し米國大博覽會日本婦人會を組織せられ有形にあつては本邦女子の手に成れる百工の製品を出陳し無形にあつては本邦婦人の古今に於ける事跡を記述して以て近年外人の著書中往々本邦婦人の情態に關し事實を謬るものあるを打破し而して我邦婦人の眞價を普く海外女子に知らしむるの主旨にて有名なる女史數名をして之れが編纂に從事せしめ其英譯文を印行して主催國及參同諸外國の貴婦人に頒布せられ嘖々の感賞を博したり本書は右の原文なり遍く本邦婦人をして右の盛擧を識らしむるの目的にて今回之れを刊行せらる其体裁は部門を分つて八編とし殊味ある所には精巧なる密畫を加へたり本邦婦人も亦一讀せらるれば蓋し外邦姉妹と其感を同ふせらるゝならん

教育學館閱　森孫一郎君編輯　文部省檢定濟

女子高等讀本

全八冊

一、二卷　各定價金拾三錢
三、四卷　同　金拾四錢
五、六、七、八卷　同　金拾六錢
郵稅各冊貳錢

本書ハ高等小學校ノ女生徒讀書教科用ニ供センガ為メ編述セルモノナリ、本書ニ載スル所ハ修身、地理、歷史、理科等ノ諸項ニ渉リテ其材料甚多シ然レ𪜈終始貞婉、淑良ノ女德ヲ養ヒ内助ノ技能ヲ授クルコトヲ主眼トシテ撰擇シ最モ日常家事ニ適要ナラシメンコトヲ務メタリ、本書ノ文章ハ簡明優美ヲ旨トシ浮華虛飾ヲ去リ材料文章共ニ學年ノ順序ニ隨ヒ易ヨリ難ニ卑ヨリ高ニ及ボシ偏ニ教授上ノ利便ヲ計リ且ツ精確ニシテ鮮麗ナル圖畫ヲ挿シ以テ教師ノ說明ヲ資ケ以テ生徒ノ好尚ヲ養フ

發兌元　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地　大日本圖書株式會社

大阪市東區博勞町四丁目　同　支社

婦人新報

明治廿八年二月廿八日發兌

○口繪藤原俊成の娘（小辯女史）○社說婦人の世界○雜錄大隈伯母堂の傳を讀む（湖處子）○雪（小金井きみ子）○別錄代表的婦人の出すべき時機（望月與三郎）○婦人の心得べき日本の法律（旭川生）○少年の話柄小兒○三千人の軍隊○家政十四才の女王○英雄の家庭○小女女皇を動かす○女皇の遊戲（ビクトリヤの犬）○○○○婦人修身の心得○看護美談シスタードーラの談○外國婦人婦人の二大クラブ○不幸なる婦人と其痛苦を訴ふ○日本の汚辱（世界に於ける日本婦人の事情を調査したる記事）○眞誠の看護○婦人○新發明○世界の人民と宗教○猴の醉狂○米國婦人矯風會事業を擴張せんとす○人類生存の年限○結婚と死亡の關係○其他緊要なる記事數件あり

定價一部金四錢郵稅五厘毎月廿八日發兌

發行所　東京市麴町區上二番町女子學院内　婦人新報社

女學雜誌

第四百八號

明治二十八年三月二十五日發兌

社説

天佑を感知するの畏

天佑を感知するは、祝福の事なり。然れども、祝福を享くるに道ありて存す。若し其道を履んで正さしく之を受けずんは、災禍反つて其が上に降らんとす。天命昭々、威嚴輕ろしく犯すべからず。上帝の德、大仁にして、大武、大慈にして、大厲なるとを惟んみれば、肅然として危坐して恐懼せずんばあらず。茲に警告して、吾が同胞と嚴そかに相思はん。

東洋に戰雲近ごろ破れてより、帝旗、日ごとに揚り、海に陸に旭日の光耀かずと云ふとなし。帝國初めより義の爲めに起てり、勝敗利鈍は深く顧ふ所ろにあらざりき。素より、非尋常の覺悟を以て起てり、未だ必らずしも連戰連勝を期せざりき。然るに、天風は之が爲に吹き、天波は之が爲に翻めき、靈鷹は舞ひ下がり、瑞象は到る處ろに開け、帝師の向ふ所ろ、竹を破り、葦を折るに異ならず。愛親覺羅氏の弱きにはあらず、日本帝國に靈能大いに加わりたるの致す所ろにあらずとせんや。……此に於てか、天佑を感知するの輿情油然として起れり。今にして回顧すれば、恐懼に堪えず。吾等が至聖至高の大日本　皇帝陛下は、其の宣戰の　勅に於て、破題最先に、天佑の二字を冠し、儼然として、臣民を警醒し玉ふ所ろのものありき。悔謝すべし、臣民、久しく茲に警念せず、徒らに聖明の預言を空にして、謹しみて御敎に聞く所ろ深からずありき。而して、今にして初めて覺醒せり。

政界の一男兒尾崎行雄、素と卓抜不屈を以て自から强うす。渠は太はだしく柔弱らしき言動を嫌避するの士なり。而も、近ごろ公會席上に演説して曰く、由來、天佑など言へる事は、宗敎家の愚談なりと思ひたりき、然れども、帝師近日の成功の跡に鑑がみて、初めて覺る所ろあり、黃海激戰の吾艦、比叡、松島などを覽るに及びて、實にも、天佑の外なきとを

確信したりと。此れ、眞とに、輿情近日の態を表明する尤とも頑固なる代言なり。今にして、吾國民、孰れか、天佑を感知せざるものあらん。

嗚呼、天佑ある、一大祝福なり。天佑を感知するは、更に一層の祝福なり。然りと雖ども、既に天佑を感知するは、巳に一大義務を感知したる也。此時に際して、其が負へる新たなる責任を廣思するにあらずんば、天佑を感知したるは、即はち災に近づきたる也。禍福の轉ずるは、微妙の機にあり。天佑を享けて、天禍を招くは、單に其の愚なるのみにあらず、驚ろくべき懦弱を證す。天命を畏るるの大國民は、如斯き亡國の運命を自作せざる也。

天佑とは、何ぞ。玆に、天に對するの釋義を煩わしくすると莫れ。そは、暫らく、神學者と、宗敎家との事業に托せん。ひとり言わざる可らざる所のものは、方今万衆、そが天佑を感知するの情に於て、汎ねく通じて悉な具存せる一道の靈覺即はち是れ也。天佑とは、何ぞ。同胞、須からく、其の所懷に聞くべし。心耳を傾むけて、嚴そかに衷情の自然に言わんとする所に聞くべし。…………曰く、人力の及ばざる所に不思議なる力あり、此力、我同胞を助く。國力の及ばざる所に靈活なる力あり、此の力、我帝國を助く。此力、正義に與みす、帝師義の爲に戰かふが故に、其助けあり。此力、上にあり、個人の上にあり、國家の上に在り、國民は其の威嚴に服從せざる可らず、と。凡そ、此等の情想は、一と度び天佑を感知したる人士が、普ねく悉な自覺すべきものとす。

夫れ、苟しくも在上の威嚴に感覺し、天の正義なる佑助を自認したる以上は、既に道德界に一段の生面を開き、新たに感知したる顯著の光明ありて存す。嗚呼、未だ見ざるものは、未だ義務を負わず、未だ信ぜざるものは、未だ責任を受けず。幸わひにして、既に見、既に信ぜば、最早や言ひ逃るべきやうなし。新たに一段の光榮を受けたるが故に、亦新たに一層の實務あり。之を道德界の大法となす。故に、此の大法を破るものは、其罰、嚴正なり。其の災は、未だ福を受けざるよりも甚だし。與へられたるものを正さしく受けざるときは、與へられたるものは、固より取らるべし、既に持てるものも、倘ほ奪はれずんば止まず。

此の故に、天佑を感知したるものは、同時に、天命に恐懼せ

ざる可らず。天佑の正義の上に下る所以のものは、天罰の不義の上に下る所以なるとを確認せざる可らず。既に、天佑を感知するとを得せしめられたるものは、之に感謝し之に戒愼するの義務を與へられたるとを自覺せざる可らず。天佑の下る所ろ、天職下る。嚴然として其使命に抱負し、謹しみて特得の聖役に盡瘁するの覺悟、最とも眞切ならざる可らず。

夫れ、此般、恐懼戒愼の覺悟は、天佑を感知せるものが、當に必らず發念懷抱すべき所ろのもの也。故に、同胞にして、今もし此に警醒し、連勝の故に彌よ戒しめ、天佑の故に彌よ愼しみ、戰々兢々として薄氷を履むが如く、益々恐懼して益々勵精する所ろあらば、天佑感應して、祝福彌よ增さん。是れ、天の命に寅畏する大國民の謹愼なり。

嗚呼、天佑を感知せざるは、尙ほ恕すべし、既に感知して其の道を履まずんば、大災を何如んせん。聖靈を知らざるは、寧ろ可なり、聖靈を瀆がすものは、遂に許さる可らず。警告す、親愛二なき大日本の我等が同胞。今ぞ即はち一大時節にてある也。警戒せよ、恐懼せよ。天佑を感知するの懼れ禁ずべからざるに非ずや。

評論

形神論

無名子喟然として歎じて曰く、太甚だしき哉、人の形神に惑ふとや、審びらかに辨じて能く其の別を正うするもの、終に幾何かある。

顧ふに我、生れて鹵、才鈍くして識見透徹せず、幾度か偏執して、幾度か誤癖し、痴遲して大道を迂回せしといくそ度ぞ。やうやくにして、妙旨に近づき、ほのかに徹光を認ためて、懸戀措くとなし。之を美め、之を撫で、之を懷きて、竊かに吾が衷ひに聽けば、感謝して、形神の智識を贊賞するの聲あり。請ふ試ろみに、其聲をうつして、世上、耳を傾むくるの道友に告げん。

曰く、形。曰く、神。そも〳〵何を以て相別つの標徵とせんか。形有る、必らずしも形にあらず。形無き、必らずしも神にあらず。神と云ふ、其云ふ所ろのもの直ちに神たるにあら

ず。形と云ふ、其言ふ所ろのもの、直ちに形たるにあらず。某が目して、神となす所ろのものも、他の某が之に倣ふや既に神にあらず。某が目して、形となす所ろのものも、他の某が之を觀ずるや、既に形にあらず。昨の形は、今の形にあらず。今の神は、來日の神にあらず。若し畫一して之を律するときは、玆に神あることなく、亦た形あることなし。若し放擲して之を空にするときは、亦た形あることなく、亦た神あるとなし。此故に、形神に常なし、其名同ふして、其實斷えず變ず。もし、其の實にして常久定まる所ろのものあらば、何の要ありてか、形神の別を論ずることを須ひん。形神の大いに辨ぜざる可らざるものは、其の常なきが故なり。形神の多く誤まらるるものは、其の名の定まらざるが故なり。而して、之を識るものありと云ふと雖ども、抑そも何如にして之を語らん。其語一つにして、其の意多し、辨ぜんと欲するもの、遂に能く辨ずることを得べき乎。嗚呼、その辨や、亦先づ形神の別を知るものにあらずんば、遂に能く眞義を聞くことなし。之を默せん歟、之を語らん歟、默するもの能く辨ずる歟、語るもの寧ろ聲なき歟。われ密かに惑ふ所ろなくんばあらず。

但だ試ろみに、其形に顧慮せず、直ちに其神を明らかにせん。形神の天使よ、冀わくは、朝たの翼を擴ひろげて、翩翻として、人の心宮の秘奥に入れよ。

能く、形の形たることを知らずんば、飜がえつて神の神たることを知るべからず。形と神とは、相對するの名なれば也。夫れ既に相ひ對するの名たり、故に先づ其實の相ひ對するを明察せずんば、未だ能く名に存するの實を知るべからず。此實未だ知るべからずば、遂に眞とに形神の別ある所以を悟ること能わざる也。

形は猶ほ客舍の如く、神は猶ほ旅人の如し。形は猶ほ衣の如く、神は猶ほ身の如し。形は猶ほ櫻花の如く、神は猶ほ春の如し。然りと雖ども、若し旅人を目して形となすものあらば、其の旅することや神なるべく、若し旅すること即はち形ならば、旅の心や神なるべし。若し身を指して之れ形なりと言ふものあらば、靈や其の神なり、靈は寧ろ形なりと言わば、天地の虛靈や其神なるべし。更に若し春を稱して形なりとせば、光氣即はち其神なるべし、光氣は尙ほ形なりと言ふことあらば、陽天の悦起する所ろ其神なりとこそ言わめ。左れど、此等終

末に於て、神なりとする所ろのもの、未だ以て常神とすべからず、忽ちにして、亦た形たることあらんは必せり。況んや、たとひ之を神なりとするも、能く神識せざるものに於ては、亦これ形たるの外なきをや。形、神、の相別るる所ろ、機一髪のみ、差、半毫のみ。凍ては、水となり、散じては、氣となる。雲となる、雨となる、七色の虹となる、靑天の白道となる、蜃氣樓となる、無々となる。嗚呼、化變する所ろ、誰れか得て容易すく限るべけんや。

其形を觀て、其神を覺らざるもの、世の所云る學者先生に於て特に甚しとす。論語を讀みて、論語を知らざるは、其形を知つて、其神を見ざるの故なり。博學にして、而も斷ずるを能はず、明らかに辨じて、而も迷ふことの多きものは、其形を知つて其神を知らざるの故なり。讀書、万卷を破ると雖ども、神を見ざるものは盲にひとし。博聞、古今に東西に盛衰に榮枯に渉ることありとも、只だ其形に精わしきものは、未だ知らざるに均とし。時、所、位の別を覺悟せざるもの、變通の妙旨に徹底せざるもの、盛んに例證を擧るもの、博學を衒ふもの、連りに某曰くと言ふもの、先例を墨守するもの、打破を改革とするもの、暴りに崇拜するもの、暴りにけなすもの、暴りに人の經驗に據らんとするもの、遂に安くんぞ、形神の別を知らんや。此類、ことに學者に多し。學者が、學の形に拘泥して、其神を重んぜざるや久し。

世上相ひ論駁する所ろのもの、大率ね、形の相異なるに驚ろきて忽まち激するにあらざるはなし。冷靜にして溫雅なるものは、暫らくにして、其の神とする所ろを相ひ窺がひ、悟徹して義意の相同じかりしことを知るや早し。彼の性急の人、小量の人、覇氣他を凌ぐの人、眞理に忠ならざるの人、忽まち激して、邪意を喚起し、曲僻して彌よ不明の地に狂奔す。此に於てか、遂に其神を相ひ識ることなし。世上の議論なるもの大率ね此類のみ。學派、學家の相異なるもの、屢ば之に過ぎざることあり。試ろみに、其形を破して、其神を露わさば、啞然として一笑せざるもの、抑そも幾人ぞ。

論議の尤とも喧ましきもの、敎宗界に於けるより太甚しきはなし。而して、其の由て起る所ろを考ふるときは、多くは是れ形而下の事のみ。信條の多少によりて相争そひ、其の異同によりて相争そひ、神學によりて相争そひ、敎制によりて相

争そひ、先人の眞意にあらざるとを種として先人の爲に相争そひ、後人の損益にあらざるとを要として后人の爲に相争そひ、相争そひて遂に争そひの斷ゆるとなし。方今の宗敎は船の如きか、波上、平らかならんが爲にして、而も平水に波を起す。平和の爲めか、平和を破らんが爲めか。宗敎界の争論の絶えざるや久しと云ふべし。而して、其の争そひや、多くは、形の爲めよりす、神の爲めにするものに至ては、甚はだ稀なり。

學と敎とは、人の智識の輻湊する所ろなり。而も、眞義の顕われざると、斯の如し。豈に何んぞ此他の凡境に付きて責めんや。立憲政躰の形に迷ひて、其の神を忘るゝものを笑ふ莫れ。文明の形に眩して、其神を輕ろんずるものを嘲ける莫れ。事業の形に誇りて、其神を後にするものを卑しむ莫れ。交際に、式儀多く、言語に、大聲多く、文學に美音多く、音樂に律呂多く、進歩に進歩多く、退歩に退歩なき、何れか皆な此の流弊の致す所ろにあらざらんや。

余曾て無神論を駁するものを聞けり。滔々として大江の逸するが如かりき。而も遂に眞實の無神論者なるものの世に無き所以を知らざる也。其駁するや、初めより敵壘を取れり。之を伸すにあらず、之を撃つ也。故に撃つと彌よ強よくして、他の覺らざると彌よ深し。遂に辨ぜざるの優れるに若かざりき。此時に當りては、辨は默するよりも更に默せる也。有神論の演説、遂に何の効かありし。

亦曾て死後存在の説を論ずるものを聞けり。切りに生理的心理學者を罵しり、もし死後我存せずと眞とに覺りたらんには、彼は決して今日の如く安んずると能わじと迄で論究せり。而も、自から事の眞相を知らざるとを知らざる也。死後、靈魂なしと言ふ所ろのものも、我なしとはせず。我なしとするものも、我らしきものなしとはせず。我らしきものなしとするものも、我に代るものなしとはせず。我に代るものなしとするものも、我に代るとして安んずべきものなしとするには非ず。子孫か、後人か、感化か、名か、人類か、歴史上の存在か、果た全滅か。たとひ、其名の何如に異なるとも、其の安んじて絶焉の運となす所ろのものは則はち之れあり。是れ其の生命を置く所ろにして、則はち死后に存在する所ろ也。同意せざる所ろは、たゞ靈魂の名にあり。名の形にあり。もし

形を去つて、其神を察すれば、人誰か死後存在を無みするものあらんや。故に論ず可き所ろのものは、有無にあらずして、度なり。敵にあらずして、同門なり。論出の當初、先づ此の覺悟を欠きて、徒らに他を惑はせ、他を激し、遂に愈よ他をして遠ざからしむる所以のものは、單に形を爭そふヿを爲して、神を發揮するヿを重んぜざるが故なり。

余は、博學能辨の人を知れり。其人、書を讀むヿ限りなし、之を暗んずるヿ指ざすが如し。盛んに之を誇るが如く、事々に其知れりとする所を表白す。然れども、表白大抵は當前の要緊と齟齬し、常に妙合圓滿の機に達せざるの觀あり。故に事々に破れ、遂に成効する者なし。若し無學と云へるヿが、書物を讀まざるヿにありとせば、其人の無學ならんヿを祈るヿあり。若し迂遠と云へるヿが、直ちに同形を以て律せざるヿにありとせば、其人の迂遠ならんヿを祈るヿあり。彌よ、博學にして、彌よ狹く、彌よ多聞にして、彌よ聞えずとせば、書を讀むの價値、そも〳〵何處にかある。

余は、宏壯なる學校を見たり、學士博士と云ふものを見たり、周密なる學制を見たり、盛んに賞めらるゝ人に接したり、容貌の美なる美人に近づきたり、鋭敏なりと言はるゝ才子と交はりたり、而して、言ふ所ろの實は何處に存するやを窺がひて遂に之を得る能はざるもの大抵皆然り。必らずしも、評判の如くならずと言ふにはあらず、評判の種は眞とに存するヿを見たり。而して、遂に馬鹿々々しく感じ、情けなく感じ、世の阿房らしきヿに感ずるや、嗚呼、これも亦た形に拘泥したるものかと慨せざるヿはあらず。

余は、亦、拘泥せざるヿを自負する人を見たり。天眞爛熳を自負する人を見たり。大悟徹底せりと自負する人を見たり。而して、拘泥なるものゝ德を知らず、天眞發揮の修飾にあるヿを知らず、大悟徹底なるものは、惑ふヿにあり、迷ふヿにあり、疑がふヿにあるヿを知らざるを見るに至りて、茲に亦た形而下の弊のひそむヿを見たり。拘泥せざるには、拘泥する所のものなかる可らず。拘泥せざるヿの、守らざるに同じきヿあり。而して、彼の拘泥せざるヿを誇るものに至ては、尤とも下等なる拘泥を爲すもの極めて多きを見たり。天眞爛熳を口にするものに、神經質の族が其の過神經を隱くさんとて强ひて放縱の姿を爲すか、度量狹小にてあり乍ら偉大磊落

七

八

など云ふことを慕ひ他の賞賛を博せんとするか、意志薄弱にして躬から細瑾を慎しむの氣力なく他の嚴密なる批判を甘受するの勇なくして則はち無頓着の態に身を投げ出すか、凡そ此類極めて非天眞、非爛熳なる醜意あるを見たり。彼の大悟徹底せりなど言ふものに至りては、多くは悟らざるの輩なり。

黄口少年にして斯の如く言ふものに至ては殊に然りとす。眇たる人間、洪大無邊の天地間に立ちて、豈に大悟徹底するとの若く容易なるものならんや。余は、斯る悟り手の太はだ悟らざることを見たり。彼等は、善悪を一つにし、大小を一つにし、人間を虫けらの如くに言ひ、天地を豆粒に比へ、有を無とし、無を有とし、切りに六かしき語ばを誦へて、超然として大禪定を得たるかの如くする僻あり。左れど、柳は綠なり、花は紅なり、雪の降る日は寒し、花の三月は温かなり、坐禪は研究なり、釋迦は、博愛凡識の通人なり。何んぞ、此輩の冷冷たり、細々たるを以て、直ちに此眞を得たりとすべけんや。

如此き、皆な形と神との別を混ずるよりして謬まる。

余は亦た、經綸に富むと云ふ人を見たり。經綸湧くが如く、法制立どころに成ると云ふも、そもそも法は、人によりて、死活するを何如にせん。同一の法も、之を用ふるの人異なるときは、同一にあらず。左らば、法の備はると、備はらざると、文字の此の義あると、彼の義あると、抑そも、何程の差違かあらん。詮ずる所ろは、活用の人によりて異同を生ずるにあらずや。然りと雖ども、人に重きを置きて、法の力を知らず、亦た時勢の力をすら知らざるものを見たり。之も亦た一眼を眇するの人なり。時勢の故によりて、人は死活す。人の大いに揚るも揚らざるも亦た時勢のみ。昔し、フランセス、ザビエありと言ひて、現に之よりも大なるもの當世に在ることを知らず。一兵士と西鄉と、ワシントンと一村長と、もし時勢を異にせば、即はち相代るの人たることを知らず。失意と得意と、勝方と負方と、敵と味方と、人物性狀の煥發に著ぢるしき相違あることを知らず。歷史を論じて惣べて空、人物を論じて惣べて當らざるもの尤とも多きは、大率ねこれ形神相對の理わりを辨ぜざるの故に由るにあらずや。

然れば、古來達識の士、審びらかに之を識とり、好く明らかに之を辨まふ。故に、其の爲す所ろは、尋常の規に合わず、飄忽として轉變し、屢ば世の常論と相反す。求むる所ろ、神に在りて

形にあらず、何んぞ、形に於て、節を變ずるが如く、義を破るが如く、道を誤まるが如く見ゆるの跡に顧慮せんや。此を以て、大義は、大奸の如く、大善は、大惡の如し。古來、眞個に大善義を遂行せる所の偉人にして、當世に奸惡を以て目せられざりしものはあらざる也。偉人を鑑識するに尤とも容易なる試驗紙は之なり、曰く、敵ありや否や、惡名ありや否やと。彼の所謂る善人なるものは、多くは平凡の輩のみ、名聲嘖々たるもの遂に能く何事をか成さんや。近人、切りに大西郷と言ふ、然れども、大西郷は當年大奸物を以て指目せられたるヿを知らずや。

且や、大ひに知れる所ろのものは、少なく言ふの外なし。大圓の一隅を指ざすもの、豈に悉とく論じ盡すべけんや。此を以て其言ふ所ろは、時に應じ、事に合はんヿを旨とす、固より、一片、一端を諭とすに過ぎざる耳。然るに、拘々の徒、やゝもすれば、前後を對して、之を矛盾と言ひ、變節と言ひ、權畧と云ふ。達識の士が、大率ねポリシーありと非らるゝもの、多くは此故なり。もし其形を棄てゝ、其神を要とせば、凡眼に映ずべき現象の破綻は、固より免かる可らず、如此き

破綻ある所以のものは、即はち眞實あるの證のみ。所謂る哲學者が人生の眞相に暗き所以、もつて知るべき也。彼等が、古賢の論を評するや、ロツクを以てす。彼等が人を論ずるや、理窟を以てす。其の哲學史を講ずるや、如何にも徹底せざる所ろあり。其の社會を見るや、所詮要緊に觸れざる所ろあり。其の所謂る博學なるものはありて、遂に一少年の眞實なるものよりも更に愚なるの奇態を示すは、必竟、哲學の形に泥づけて、其神を徹悟せざるの致す所ろ也。往々哲學の無用に屬するヿあるは、此の一事を欠くが故のみ。

蓋し、虚靈不昧を磨き、神智活覺を醒まし、事物に經驗し、其精髓を實踐し、直ちに根底に入り、眞相に觸れ、所謂る、精、精と通じ、氣、氣と感じ、生物生生物の妙機に中りて、堅實眞諦に覺味する所ろのものあるにあらずんば、未だ以て眞智識を得たりとすべからず。之れ、形を破つて神に入るの意也。

所謂る精神的とは、單に無形的の謂にあらず。土木金石に其精神あるが如く、精神にも亦た其精神にあらざるものゝ存す。かの切りに精神的と言ふものにして、屢ば精神を得ざるもの

あり。懐慨は必らずしも精神的にあらず。宗教は必らずしも精神的にあらず。凡そ、あらゆる事物、其のあらゆる階段とあらゆる事情とに於て、もし其形に拘らひて、其神に徹せざるときは、則はち皆な精神的にあらず。

観るべし、人生大道の進化發達に在ることを。理想上にかゝる。至善、終極に存す。上帝、天に居ます。招きて以つて人を呼ぶ。人や、當に進化すべし。發達するにあらずんば、生きざるにひとし。此を以て、語ばに、上下と云ひ、賢愚と云ひ、優劣と云ひ、善惡と云ひ、救ひ及び罪と云ひ、天國地國と云ふものあり、何れか此の方針に對するの比較語にあらざらんや。左れば、彼等に常名なし、相對するを以て其實を變ず。進化の方向に向ふとき、之を積極とす。退化の方向に向ふとき、之を消極とす。消極は即はち形に非ずや、積極は即はち神にあらずや。多くの秘密此に存す。無益なる爭議、此を知らざるより發す。同中異あり、異境同あり。現象相違ひて精神の相同じき所以、一に之より來る。

嗚呼、形、神、の考がえざる可らざる斯の如し。之を考ふるに於て、亦、形、神の別を思はずんばある可らず。讀者もし、此文の形に於て覽るあらば、其の神を了すること能はじ。其形は、之を破せん、其形は、之を火かん、只冀ふらくは、其の神を輸たさん。好く學ぶものは、異形を裝ほふ、好く用ふるものは、異形をつくる。此文の筆者は、此文の直ちに用いられんことを祈らず、其の『或る者』の貫徹せんことを祈る。世上の同人、冀ふらくは、無に有を探り、形外に其神を吸へよ。

博愛社の事業

精神界に於て屢ば聞く所ろの聲はこれ也、曰く、事業家なし、と。

事業家なきにあらず。精神家の感服すべき事業家乏なき耳。其の少なきことは、善人の少なきよりも少なし。善き事業家に至ては、殆んど、稀なり。

利己の慾心よりするものは、精神界の事業家にはあらず。自から安樂を貪ぼるものは、精神界の事業家にはあらず。夫れ、富貴を獲るの伎倆ありて、自から富貴に耽らず、富貴に親しむの地位にあつて、自から富貴に染まざるは、是れ堯舜天

下を治むるの心に非ずや。此心を以て、精神界の事業家が心となす、宜なる哉、其人の甚はだ尠なくして、此人の甚はだ尊とき事。

貧賤にして、貧賤に安んずるは、寧ろ易し。富貴を獲がたくして、富貴を羨やまざるは、倘及ぶべし。彼の身、富貴の實權を握つて而して自から利せず、丢然として自から貧しくして、而して肯て之を我物とせざるの心術に至では、則はち大人の心なり、大人の世に少なきや當然なり。

夫れ少なし、故に之を望むと彌よ切なり。精神界に於ける事業家の懇望せらるると、今日よりも切なるはあらず。

惟ふに、世上、其人なくんばあらず。但だ事業なるものを輕んじて、天才、之に至誠を與ふるとを喜こばず、獨り空しく名を重んじて、他の花々しき事行に思を傾むく。之を以て、事業家なるもの丶世に大成するや少なし。

曩きに亡小橋君、精神的事業家の同盟を期圖し、天下熱誠の同志、一面に其事業に忠勤して、他の一面に世の慈善に共同助力せんとを望みとす。則はち、博愛社を起して、此等有志の同盟器關となさんとし、率先して、自から農耕し、收益悉皆を擧て孤兒貧兒を救育せり。

不幸にして、小橋君は逝去せり。然れども、君が抱負したる經綸、君が理想したる事業家は、日に益々切要なるとを覺る。故に、所云る博愛社的の團結なるものは、將來に於て必らずや膨脹せんとを信ず。否な、必らずや、膨脹せしめざる可からず。

惟ふに、方今所々、有志既に多かるべし。其產を天より托せられて、其收益を現時の公用に供し、大率ね十一の利を擧て同盟せる慈善の業に寄附し、即はち、事業家の合力を以て、博愛の善事を遂行するが如きは、極めて、麗はしき計畫にあらずや。昔しは、尊德先生、躬行率先して、同志を警醒し、所云る報德講を組織せしめて、以て共同慈善の經綸を施こせり。餘德芳薫尙ほ力あり、現に、所々依然として報德講積善事業の實地に行はれつつあるを見る也。故に、所云る博愛社の事業の如き、亦た其人を得て、彌よ發揮せんとす。而して、其人なきにあらず、世上冷眼視して之を知らざるとも亦あり。如此くんば則ち、先づ世上に向つて警告せざる可らざる也。

丁汝昌自殺の辨

丁汝昌の自殺は、多數の同情と賛歎とを得たり。然れども、亦た異議を挿はさむものもなきに非ず。

滿朝大率ね浮文輕弱の輩。武人、また命を惜みて惣べて連敗連走するの時、ひとり水師を指揮して頑强の抵抗を爲し、力盡き勢決するの後ち、只だ生靈の爲めに肯えて降を乞ひ、万事正に了して潔然として徐むろに自盡したるは、あつぱれ、勇々しき最期なり。此一事は、砂漠に花を咲かせ、暗黑に一點光を輝やかしたらんが如し。支那國武人の榮譽、地より天に上られたり。同じく、東洋人種なれば、今少こしはと兼ねて遺憾に思ひたる心の爽やかとなれり。否な啻に、東洋人種としてのみならず、武人とし、愛國者とし、人類として、斯る潔よき人物の世にありしとを願ふは、極めて快よきと也。丁氏、末期の苦衷に同情を表すると共に、其の立派なる最期の爲躰に賛歎せざるものは稀なるべし。

獨り玆に「自殺」の所作につきて非議するもの丶中に、多少の異論なくんばあらず。**自殺は、勇に似て、臆病なるとあり**。自から苦痛を迎えて人生尤とも畏避すべき死の運を速ぬくは、多少の勇氣あるに由る如くは見ゆれども、實は、躰面を損し恥辱を蒙むるとの痛苦に堪えずして、自から其の悲慘を免れんとて則はち自殺す。これ、一種の臆病にして、其の卑怯なるとは、免かれず。丁汝昌の死や、降ては、恥に忍ぶと能わず、歸りては、大刑を受るに堪えざるが故にはあらざりしか。彼は、其乞を許されて、既に、生靈を保全するの確答を得たり。此時に及んでは、更ためて自から死せざる可らざるの必要あるとなし。左らば、丁氏の自殺は、恥に耐えずして、躰面を維持せんが爲めの最期なり。之を市井匹夫の勇に於てし、之を尋常、譽を競ふの武士に於てせしめば、則はち可なるも、堂々たる大帝國の水師提督として、而も、人類最上の理想によりて之を思ふときは、寧ろ未だ足らざる者あるを免れずと。

之れ一思して未だ再思せざるの論のみ。西洋人が自殺を非とするの論法に拘泥し、徒らに宗教の形式に則とりて、生死の眞の道に考がえ及ぼさず、温たかに烈士の胸懷を懷ひて、其の熱誠に同情を寄せざるの致す所ろ、寧ろ痴論たり。

武職を全くし、大義を辨じ、濃やかに意氣に感通し、仔細に後事を慮ばかり、着々宜しきを得て、從容として死に就かんとし、更に一言を傳えて曰く、交戰何の時に止むかを知らず、然れども、其時乞ふ東洋以外の人をして喙を容れしむる勿れと。如斯き、餘裕、如斯き雅量、如斯き識見ありて、冷靜として自盡せる偉男子の心裏は、斷じて輕ろらかなる論理を以て規矩すべきものにあらず。

丁氏にして區々一身生存の道を講ずるものとなすこと莫れ。彼は、如何にして、其國に盡すべきやの至誠を、最期に至る迄で確把せり。其のチメ〳〵として降るは、國に盡すの道か。一種の道德に則とりて、敵に降り、西洋人が所謂る恥を忍ふの苦に堪ゆるは、即はち國に盡すの道か。丁氏は、支那人なり、支那人の國家に盡す可き道は、則はち、支那人の爲めに尤とも善益ある結果を生ずべき措置たらずんばある可らず。此時に方りては、彼が如く自殺するは、則はち、最上の道なり。

彼は自殺せり、之れ支那人が尤とも成し難きの道を履んで、武職の大勇を示せるなり。彼は死せり、故に彼は後進幾多の年少士官が心の中に生きたり。彼は死せり、故に彼は清朝懦弱の臣民を警醒して、其の愛國心を活かせたり。彼の死は生きたる也。彼れ死せずんば、遂に如斯き活動を惹起すること能はず。

身を戰に殉じ、自から難を侵して進んで打死するは、一種の自殺にあらずや。友の爲に生命を捐つ、亦た自殺にあらずや。國家の爲めに、生命を獻ず、亦た自殺にあらずや。大凡そ、人の爲めに苦しんで自から困倒することを知らざるものは、皆な自殺にあらずや。此般の自殺、すべて仁の大なるものとせば、丁氏の自殺は、即はち亦た大仁なり。亦何の疑ふべきことかあらん。

○人物論

橫井小楠。大鹽中齋。フレデリツク、ロベルトソン。松村介石君特得の論評を寄すべきの人。むべなり、警抜至靈の着眼、他に多く類なきの警句教語を發見し來ること。

○征清逸話忠魂帖

春陽堂の此著、時節がら便利且つ有益なり。

隨感

○小橋君を憶ふ

小橋勝之助君逝きてより正に二年。今日、君を憶ひて、追思禁じがたし。信仰と經濟と、博愛と事業と。好く之を結合して、麗わしき實行に現すもの、當世、幾人ぞ。勤儉にして、能く己に克ち、遠く望みて、近く警しむるもの、多しとせず。今にして、君を念ひ、思ひて彌よ切なるとを覺ゆ。膨大なると瓢の如く、流るると水の如き事業は、これ世に於て見るとを得ん。確乎たる信念を天父に置き、事々に祈りして、而も狂激急奔するとなき、君が如きクリスチァンの事業は、多く見るとを得ず。今や、信仰界、漠索として寂びし。大聲、切りに聞えて、幽けき樹陰の祈りの聲太はだ稀なり。われ、其人に餓え、其念ひに渇して、君を念ふと、亦た切なり。嗚呼、君去つて二歳。春花、三たび開かんとして、友や則はち亡し。君、夫れ、何の郷に今や翩翩として遊ぶ。只だ願ふに、精神、固く存し、遺業、堅實なり。君が弟君あり、君が心友あり、君が身後の知己あり。君が理想たる博愛社の事業なるものは、蓋し將來大いに發達せん。これ、君が限りなきの生命にあらずや。(三月十二日記)。

○遠離のおもひ

久しく見ぬ人にあくがれて、とある夕べ、つく〴〵と思ひ運らせば、昔し在りにしと、歷然として、當日の感情、血を湧かして起り來る。實にも、人の交わりこそ、あやしきものなれ。一と度び、奥底のまことに接して、至情相許すの聖鎖に結ぼれたらん後は、疑がはんとして疑がふと能はず、忘れんとして忘るると能はず、况してや、之を離ち、之を消さんとするとをや。世は廣しと言へども、こゝのみ眞とに枕らすべく、人は多けれども、此の人のみ眞の人と安んぜらるる也。追念して當日の樂しみを回顧すれば、今無きとも有るにひとし。床しき香ひ長久えに馥郁として、わが胸のほとりに限りなく薫らんか。胸中に其像あり、眼底に彷彿として淸容を存す。時に聲を放つて呼びかけ、人無き折、之と語れば、綿々

として情緒つきず。左れど、世に居ますと知れる限り、現實に相見たし。速やかに相見たしと思ひ起すときは、心血絞らるる如く、胸痛くして、全身に電火通ず。意わず、月明に影を踏み、樹木を抱ひて泣く。一鳥悲しげに飛び、隣家に笑ひ聲のするとき、誰か、衷心の苦痛を知らん。月よ、吾に同情を與へよ。樹かげよ、吾に同情を寄せよ。言はんと欲して言わず、陳べんとして陳べず、默して沈頭し、輕ろく笑ひて、密かに涙を揮ふ。物の哀れこそ哀れなれ。

○只だ信ぜよ

ざわ〳〵として騷ぎ立つ宗教界の世の様や。紛々として議説縱横に起り、各々所見を呈して、教勢衰微の挽回を講ぜらる。われは、一々閲讀するの要もなけれど、見渡す限り、何とて斯くは杞憂の多きぞと、淺ましく感ずる念ひのする也。宗教界衰ろへしか、否や、未だ容易すく辨ずべからず。もし衰ろへしとすれば、別義あるにあらず、但だ信仰の衰ろへしが故なるべし。信仰何によつて衰ろへしと問ふものあらば、固より明白なり、信ずるとの衰ろへし耳。そも〳〵宗教の信念なるものは、人性の自然に發して、其赤誠の養なふ所ろたり。苟くも、赤誠を披きて、在上の天に遡がんとき、何んぞ、信なからん。信なきは、未だ其の誠を悉さゞるに由る耳。故に、薄信の輩に言ふべきとは、多岐にあらず、眞とに一つなり。曰く、信ぜよ、信ずるときは救わるべしと、これ也。何んぞ、拘々として、必らずしも、器械的、儀式的、偶像的など云ふものを斥けんとすることに泥むや。凡そ、生命あるもの之を取れば、すべて生き、生命なきもの之を取れば、何ものも、器械たらざるなし、何ものも儀式偶像たらざるなし。只要ふべきは、信仰の生命、其内に充溢せざるにあり。

○傳道は傳心にあり

斯る淡泊の辨説にて滿足するの好人物よ、人の懷疑は、斯の如き長閑けき一言にて解くべきかはと。嗚呼、論士よ、少しく、至情に反り、明らかに事の實際に見よ。倫理の百の說法は、實行の一つの美事よりも力よわし。親子間の道を研究すると如何に精緻なるも、孝子が赤情の流露するに及かざるにあらずや。傳道は、以心傳心なり。此心、基督之を徒弟に傳

え、徒弟之を弟子に傳え、弟子之を敎父に傳え、連綿活々として遂に吾輩に至る。吾輩が之を傳ふるも亦た生命によつてにあらずや。信仰は、信仰より生れ、心は、心に通ず。吾にして、若し篤く信ぜば、一言せざるも尙ほ其信を傳ふべし、況んや之を一言するをや。彼の敎理神學の講究に力を費やすものは、學問として傳えよ、所云る宗敎の生命なるものは、玆に存せざる也。自から死ぬる外に信ぜずして、如何で人をして生命を托する迄に信ぜしむることを得んや。若し、今日の傳道に言ふべきことありとせば、そは、自から確信せざる人が信仰の道を說くこと即はちこれ也。

○慕ふものこそ厭ふなれ

世を厭ふとは惣べて厭ふにはあらず、玆に厭ふ所ろのあるは、別に慕ふ所のあるに由る。さびしきを好むは、さびしからんとて好むものかは。さびしさの同情をうけて之に慰さまんとてなり。默して言はぬ心の内には、斷えず語る秘め事あり。外につめたき不愛想こそ、遣る瀬なき淚の漲ぎるなれ。枯木にとまる寒鴉が、ひとり物思ふ時、心に春の回顧あり。法師世を棄てゝ山に入るは、山をすみかとすればなり。姿は墨染にかはり、身は方外に隱るるとも、人として情けに動かざるものやある。たゞ、形跡に論じて、無情と嘲けり、大悲の博ろき愛くしみを、遁世と名けて、出家は、人情を破るものとのみ思ふぞ淺墓なれ。昔し、西山の邊りに芝の庵を結び、俗塵を捨てて、西へ行く末期の御法を味はふの人も、

淋しさに堪えたる人の又もあれな、
いほりならべん冬の山里。

とうたひて、法師にも友は戀しく、仙人にも、隣は欲しかりけり。

○人力車夫

嗚呼人力車夫、泥濘に脚を沒し、寒風に膚を暴らし、粗食して粗衣し、終日、奔走馳驅する所ろのものは、客を乗せて其望に到らしめんが爲めにあらずや。夫れ、人を道に乘せて彼岸に送らんとするの道士は、拮据する所ろ、此の車夫にすら劣れることなからずや。但だ道士と車夫と異なる所のものは、一は道の爲めにすると、他は錢の爲めにするとの差にあり、

然れども、若し道士にして名利の為にするとあらば、遂に路上の人力車夫にだも及かざる可し。

○山路の電信線

柱、悄然として立つ。一線、横さまに渡る。渡る所ろ、何處ぞ。遥かに、東都に達すとは言ふ。愛思、此より傳わり、悲慘、此より傳わり、戰況、吉事、訃音、祝賀、皆此より傳わりつゝある也。小雀來り、其が上に息こふ。悠々吟歌して、足下に轟ろける千變萬態を知るとなし。

○四面白雪

其の降るや音なし。而も、久しからずして被ふ。其被ふや周ねく、周ねくして、皆な白し。天地皆な白し、万物皆な潔ぎよし。人間界、如斯く速やかに敎化せらるゝの方ありや。

○松を花として

古人の情けを繊細なりとのみ言ふとなかれ。彼等は能く「松」を花として愛したり。今人が松に於ける、苅入れたる庭前のつくりものにあらねば、月下にうつる影のゆかしき様をのみ珍重す。松を松として愛惜する稍や雄々しげなる風流の心は、寧ろ減りたらんかな。

こゝを又わがすみうくてう　れなば、
松はひとりにならんとすらん。

松も昔しの友ならずと歎つ。實に、松を眞との友とせしは、古人にこそあるめれ。

○亡き人の御前に

心靈をさゝげて遥かに告ぐ。貞淑温雅の故人、暫らく顧みて、衷情のたむけを享けよ。たとひ、幽明、所を異にすとも、等しく、天地の間に宿かる。よし互ひに相見ることを得ずとも、御神の御前にともに跪づかしてあらんや。知り玉ふべし、御子健やかにして、彌よ生ひ立ち、愛人、わづかに砕けたる心をつくろひて、稍や光明あることを。生者、死ありと雖ども、死者の存らふるとは止まず。既に朽果つる肉の衣を脱ぎて、聖なる御姿によそはせ玉へば、長久までに之を思ひ之を慕ひて限りなき御交わりに感謝せん。髣髴として降りませと申す。

女學

順貞の妻は良人之をつくる

嗚呼、冷やかなり女權論、何んぞ據り所ろを迂遠の理窟に於て求めんとはするぞ。嗚呼、無情、何等なさけなきの丈夫ぞ、故らに威力を用ひて弱者を抑えんとす。天の妙工に成れる自然の友、男女兩性よ。如何なれば、直ちに至情を示して、其の眞の奥底を叩かざる。實にあやしき妙えなる機關は、初めより自から汝等の天稟に存す。もし開ひて之を合せ、結んで之を接がば、靈氣忽まち感通して、滿心の美を發揮すべきに。何事の故ありて、かくは遠々しく、空々しく、冷やかに且つ究屈ならんとはするぞ。

天地博大の美わかれて男女の二つに存し、故さらに相ひ合するとによりて、光を發たんとす。光の發する時や、人情の至眞顯われ、飾りなく僞わりなき人の「まこと」初めて、輝やく。一と度び此の春に會わざれば、眞心の花は開かず。一と度び此の秋にあわざれば、物の哀れは知れず。既に一と度び此の春秋を經れば、歳月忽焉として進み、人生の景色、儵然一變す。

天に在りては比翼の鳥、地にありては連理の枝、水に入つては鴛鴦のつがひ、山に入りてはつま戀ふ鹿。そもや、何ものを擧げて、わが此の不思儀なる情思をたとえん。人無き時ににぎわしきは、思ふ心の自由に働らけばなり、傍わらに、其人居ますが如し。人多き時にさびしきは、かしましきが空なればなり、人は無情のものよと悲しくのみ思はる。心なしと見えし草木の花の情けは、露に涙を落とし、意味もなく流れし河の水は、岸をさらひて別れにひそめく。雲は遙かに姿を彩どりて、池の鏡に化粧し、山は夕日に顏あからめて、伏して谷間のひめ事を窺がふ。追ふ厂よ、鳴く聲を誰に聞かせんとし、月に叫んで行衛を問はんとするか。飛ぶ魚よ、うらやましくも喜こびに躍りて、何の戯むれに同もに遊ぶか。若し幸はひにして意中の人と相攜えて逍遥遊せば、見つつ行く万物の色は、すべて媚びて吾等に同情を寄せんとすらん。

玆に、御神の御許しを受け、世間社會の公認を經て、一生を

夫婦と契り、終身を同伴につがえし妹脊こそ、愛に相老ひの友の友たるべし。之よりして、一躰たり、之よりして、表裏たり。影の形に傍ひ、身の心に伴わんより、離れがたきぞ、眞の伉儷なれ。

世に賢婦、丈夫の一方を賞めて、他を忘るるこそ淺墓なれ。

貞婦あるときは、其良人、必らず愛夫なり。丈夫あるときは、其妻必らず情け深し。如何に表面のけしきは異相を呈するとも、審びらかに察すれば、遂に此の格言に違ふものは少なからん。良人の妻をつくる如く、妻は良人をつくる。熱愛の下にくゞりて、情思の互ひに相通ずるものなくば、彼等如何にして美くしく其性を完くせんや。

取り分けて言ふべきは、貞女賢婦が甲斐〳〵しき所以の動機これ也。中には、生れ乍らの生話好きと、多血質の奔走家もありぬべけれど、大凡そ、婦女子の生き〳〵として喜んで活動する所以のものは、密かに其衷心の愛を刺激して、彼女が情けを執着せしむべき、或る眞心を凝らすの一物、何處にか存すれば也。就中、人の妻に於て特に然り。

若し妻にして顔ばせ活き動き、取なし爽快にして、ソワ〳〵とする迄で活動し、一種の乙女氣つねに存して、斷えず微笑みて仕事を樂しむの風あらば、たとひ其良人たるもの朴として冷やかげに、無愛相に構ひつけぬ樣姿あるとも、人の知らぬ所ろに濃やかなる情けありて、一點の急所に妻の心を滿足させ、シミ〳〵と喜ばせて、其の生命をも惜しまぬまでに感謝せしむる秘訣を盡し居らんと明白なり。客の前にて接吻し、客の歸りたる後、臀を叩く西洋人の夫婦は、日本人の理想と異なる。素朴冷々、默としてそつけなき良人には、反つて無量深遠の情けあり。證跡歷然たり、妻の行作に現わるゝ所ろに覽て明白ならん。

女はわれ人一むきに思ひ返しのなきもの、之と心を定めし一生の連添ふ人に、不愍をかけられ、眞心を寄せられ、信ぜられ、愛せらるるほど悦こばしきとの何處にあらうや。此に至れば、忝ぢけなく、有がたく、うれしく、勿躰なく、草履あらば額ひにもつけたく思ふべし、之を女の至情となす。それ、女權に關すなど言はんものこそ、眞の女權を知らぬなれ。至情こゝに至りて、初めて女の天眞發揮し、犧牲獻身はものかわ。何如なることにても、爲し得られざるとはなし。此に至

れば、女の勇氣は、拔山蓋世の勇よりも勇なり。男の臆病にして、二心ある如きにはあらず。

左れば、妻の順操謙貞ならぬは、妻の惡しきのみにあらず、良人のあしき也。良人、之を制仰すること能はざるによつて惡しゝと言わんより、先づ之を正當に熱愛せざるが爲めに惡しと言わざる可らず。威あつて猛けきが下の熱愛は、妻をして身を殺す迄に至らしむ。此に至らしめざるは、良人の誡の足らざるに因ること多し。

顧みれば、犬と猫と喧嘩絶えざる世なるかな。夫婦の仲あしきを見るほど心地わろきは無し。叱して漸やく妻を制せんとし、不平怨言して表て向き良人に從がふなど、ホームは既に惡鬼の卵を孵へしつゝあり。之より以往言ふに及ばず。

余は、此文に於て、妻を熱愛するの道を世の良人に勸めたり。之れ素より一方の説のみ。妻に對して言ふべき道はもとより別に多くある也。

よしさらば物を心にまかせじよ、
心だものにうちまかせつゝ。
無住法師

食時會話の説

二〇

食ふに言はぬ方、善きか惡しきか。

之を生理上に考ふるに、食事の際だけ、氣を弛るめ、躰を寬ふし、快活の心地にてあらんこそ宜しけれ。斯の如くなれば、消化容易すく、滋養大ひに增すべし。

之を人情に考ふるに、食事の折は、至つて親しみ易きものなり。自から身躰うちくつろぎ、平和氣樂にして、和睦の念ひ湧き出づるを常とす。

左れば、食事を同もにするは、親和の心地にして、究屈の煩らひにあらず。此時に當つて、相話し、相談じ、嬉々として無邪氣の睦みを爲すは、自然の事とす。食ふに言いふは、常を得たるが如し。

之を禮法に考ふるに、食中談話の不可なる所以を見ず。飯粒、前に落つ、拾ふて之を食ふなどこそ見惡くけれ。苟しくも、口に頰張りてモグ〳〵として辨じ、而も、時として喉につめ、くさめして吹き飛ばすなどの醜態を現ぜざる限り、食らひ且つ言ふの躰裁は、寧ろ上品なり。餓鬼が餌にありつき、瘠

犬が骨を見出したらん如く、默して一處懸命ガツ〳〵として只だ但だシヤブリ居る耳は、餘り高尚の風には非ず。

人生の樂しみは、過半、食物にあり。美人の美よりも、身後の名よりも、生前一餐の珍味は優れたり、滿腹の佳味は、天國を忽まちにして來らすと思はんもの、ひとり小説界のクヂルム、チリングリーのみにはあらず。一日の食は、三度に超えず、三度の食は、一回にても甘かるべし。若し、之を欠ひて、其樂を奪はゞ、人は餓えざるに先づ死せん。而して、食を甘くし、樂しくするの秘訣は、談話にあり。

然るに、食ふに言わぬなど、究屈の禮法が世に出でたる所以のものは、當初、大抵美くしからぬものを食して、手と口とを穢がし、長幼、別を正すの規あまりに過酷にして、臭氣を口外より出さしめずなどの注意より起りしものか。我國に傳わりて徳川氏時代の習慣と相合するや、在上の人、御膳を下さるる折の儀式摸範となりて、喩えば、白木三方を前に据えたらんほどの用心にて、謹しみかしこみて食するを美とし、扨ては一般普通の禮法にも布及して、遂に食ふに默するを則とするには至りけん。

西洋風の人、忽まち外國人がテーブルの上の愉快さに心醉し、日本の食事法も、速やかに斯の如くせざる可らずと主張するものあり。

食中談話の自然なる故由は、前に辨じたるが如しと雖ども、今の我國の食品獻立は、談話しツヽ食せしむるの仕組にあらず。今の料理に相應しては、話しなどをせず、サツサと食し了ると則はち其の自然なりと言ふの一理をば忘る可らず。

西洋料理は、談話を爲さしめんとの主旨にて獻立をつくれるが如し。先づ、ソツプにて喉を潤ほし、舌のすべりを宜しくするとは、言ふに及ばず。一品、一品、かわる〳〵出でて、談話に時を移せばとて、冷却するの憂ひなし。元來、冷却を憂ひとせざるほどの生ぬるさに料理したるが、西洋風にて、初めより熱きを賞味するものとてはなし。此の一點に於ては、西洋人の舌は猫の舌に似たり。左れど、此の生ぬるさをも、尚ほ能く程好からしめんと欲せば、次の品の出を遲くすれば可なり。而して、一品出づる毎に、之を切り、之を割り、我國にては小供の口に入れてやるほどの小さき分量を一つ宛、挿はさみ、すくひ、又た、ちぎりて食す。其間だ、一ケ餘間

を存し、彼、一言、此一言、宛がら口に頬張るの憂ひなき間だ〳〵に、美くしく相話しするの餘裕あるべし。故に、西洋料理の献立は、初めより食中談話を趣構して調のえたるもの也。

之に反し、日本料理の忙わしきと非常なり。一度にあらゆる馳走を列らべ、汁も、つゆも、同時に出づ。大急ぎに食らわずんば、忽まち冷却すべし。且や、食品の味、飯と相對して塩梅せられ、菜と飯とを同時に舌の上に載せざれば、風味宜しからず。西洋料理の一品一品獨立の味を存するものと同じからず。故に、菜を食らへば、直ちに飯を入れ、前後同伴の工夫をせざれば、鹽糖辛甘みな風味を得ず。之れ、大急ぎに急ぎ、驅足にてかき込まざるを得ざるの所以なりとす。

客の前にて、肉を切り骨を去ると文明か。庖厨にて悉とく用意し、颯つと客の前に出すときは万事既に備のひ居る方、開化したるものにあらずや。况んや、箸を用うるの巧妙なるは、ホーク、ナイフを用うるよりも、美術上に高等なり。日本料理の風味の加減は、驚ろくべき發達を爲せり。凡そ、此般の長短を言わば、我國の献立は、決して西洋風のに劣るものにあらずと雖ども、兎に角、食中談話の一事より論ずれば、便不便の相違ふと、如斯く甚しきことは明らか也。

故に曰く、西洋、日本、ともに其料理法は、習慣と列んで發達したり。其習慣を變えんとせば、料理の方をも亦た變えて、先づ食中談話するの餘裕あるほどに献立を改ためざる可らず。然らざれば、單に、テーブル上の談話の躰裁をのみ採り用ひんとするとも能わじ。

吾等は、宴會に列して、男女同席の會合を見る毎に、如何にも婦女子の氣の毒なるに歎息する也。男子は、飲めよ歌へよと騒ぎ、騒ぎ了つて、茶漬に淡泊の風味を取る時迄で、婦女子は大抵ツクネンとして待ちつゝあり。膝に手をあげて、男子のお茶漬に至るを辛棒せらるる殊勝さは千松にも似たり。たまには、少しヅヽ、箸を下し、鳥の嘴にてつゝく如く、あちらこちら少しヅヽ、啄ばめども、酒に好き菜か、飯と共に食ふ菜なれば、双方を欠きては、甘くもあらず。

吾等は、此躰を見て、男女同席の宴會にては、スシを用ゆるとを善しと考がえたり。或は、パンとヂヤム。もしくは、ラム子を添ゆるも亦可なりと思ひたり。要するに、婦女子の前

にて勝手に飲みさわぎ、而も同じ會費にて、飲酒の割前は、實際婦女子にも負擔させ、究屈がらせ、困らせ、腹すかさせ、而して、揚々得意のクダを卷くに至ては、男子の横着も亦た極まれりと言ふべし。

婦女子は、會費の事は言わぬなるべし。左れど、斯る會合は到底榮えまじ。樂しき宴會を衰ろへしめ、眞の交際を止むるものとして歎くべし。

假りに此の一例を添えて、日本食物献立法の改良を促がし、徐むろに食中談話の道を開かんとす。

子供のはなし

◉「兒」は、人生の花、花に於ける蝶の如し。世に兒と云ふものなくば、何如に、味氣なく、さびしきぞや。天國とは、彼等が遊ぶ所ろならめ、賽の河原を幼稚園なりと見れば、地獄の内とも思ほへず。家に、子供なければ、火の消えたる如く、人にして、子供の愛らしきに樂しまずば、人生の光は認ためがたし。支那人の冷淡なるも、仙人の圖に童兒を添ゆ。劇場に遊んで、尤とも感ずるは、子役の天眞爛熳たるにあらずや。傳え聞く、大泥棒は、子供のある家を恐るとかや、其愛らしきに見惚れて氣を許さんとすれば也。義理の柵は、愛兒の結び目を最上の難所とす。故に、西行が發心の初めは、子供を蹴るにあり、安心の終りは、子供を敎に誘ふにあり。夫れ、世に於て尤とも勢力あるものを誰とすと問ふ人あらば、答へて曰はん、「兒」なりと。

◉兒を愛するとは、至れり盡せり。但だ、之を重んずるとに於ては、未だ足らざるものある也。兒は、完備したる一個の人類なるを、兎角、其の半分にも至らざるものの如く感ずる人あり。蝶よ、花よと愛でんは、親の至情ながら、子は既に人間なれば、蝶、花を愛づると異なりたる格別の敬意なかる可らず。心の喜こびに珍重し、恃ひの慰さめに可愛ゆがるとも、一段尊敬の思ひをもて之を過せずば、未だ親たるの義務を悉せりと言ふべからず。曰く、子供は何の用をも爲すまじ、左れど大人豪傑は皆な一度び子供たりきと。子供は、あらゆる美質を存して、將に之を開かんとしつゝあるもの也。未だ開かざる蕾の價値、花に劣らざるとを知らば、何んぞ、子供

を完人物の實藏として敬重することをせざる。

●西洋人曰く、日本は子供の爲めの樂園なりと。實に、氣候温暖に、春色よろしく、天然の恩物至る所ろに具はり、四方みな幼稚園たるの景色あり。然るに、子供を一種の大人として、之を重んじ、之れに注意し、之が爲めに種々の工夫を盡すとの途に西洋人に及ばざる躰あるは、何事ぞや。子供の事を書きたる好き書物とては、在來絶無なりき。學者と稱するものすら、子供の心理を考がえたることは、嘗て有らざりき。近年やうやく心づきて、子供の爲めにするものもあれど、實際路に當るものは、しろうとを多しとす、必竟、世のもとめに應ずる假りの供給に過ぎず。願くは、眞とに、子供の心理を研究して、能く其の要緊に中らんものが、仔細に考慮して適切の敎育法を說き示さんことを。

●近頃ろ、外國に行はるる小兒學の研究に倣ひ、本邦にても同樣の考察を爲さんとするものあるは可し。然し乍ら、第一に知らざる可らざるは、之にも亦た日本固有の道筋あるべし、日本の小兒の發達は自から西洋人のと異なる、故に日本小兒の心理なるものを特別に研究するの抱負なかる可らざることれ也。而して、此の研究を行ふの第一着手は、既に多年子供を取扱かひ、暗に其心理を實際に學得し乍ら、只だ組織的に說述すること能はざる如き實驗家—即はち、經驗ある母、姆、子守など—の實際談を聞き、好く味わひ、正さしく調整して、以て學理に組織すること、即はち是れ也。

（本誌去年夏前諸號小兒學の論參看すべし）

「女子の本分」を讀む

三輪田眞佐子女史之を著わし、國光社より發兌す。二百十八頁の中本にて、章を、總論、女德、女子特別の身分、女子の藝業、女子の容裝、女子の人に接する道、女子の生活及人物、結論の八つに分ちたり。

言を實驗親試のまごゝろより發し、識見確固として一種の奇氣人を射るの處ろ、本書の長所となす。凡そ、守る所ろ固き長老自得の婦女子は、其覺悟の雄々しきと同もに多少の僻見を免かれず、稍もすれば迂遠偏狹の弊に陷いり易きものなるに、本書の著者は、舊時代に人となりて、當世に齒ひ高から

んと思はるゝに、太はだ公平にして好く大勢に達したる秀抜の訓戒を與へらるゝ所多し。曰く、

一國の習慣にして害なきものは容易に廢すべからず、而して習慣の常理に悖らざるものは、是れ其國の道なり。一得一失は天地の常數なり、故に西洋女子も我より長ずる所なきにしもあらず、左れば其長ずる所に限り之を採るは進化の道なれば、徒らに其善きものをも誹るべからず。唯、日本女子たる心を基礎として廣く智識を世界に求めよかし

(二百十頁)。

之れ本書一部の精神なり又主義ならん。此こゝろ全躰に貫徹せるを見る。

且や、本書の著者は、好く自然を樂しむの妙悟を得たり。惟ふに、チーチウアに於ける幽靜自得の經驗あたゝかき御方ならめ。此氣所々に露はるれども、尤とも麗はしきは、左の一段にあり、

誰か言ふ。石鐵浮び、毛葉沈むと。若能く此理を解するものあらば、宇内の大則を知るものとこそ云ふべけれ。宜なる哉、古より、衆に秀でゝ道を知りしものは、悉とく自然

の現象を愛せざるものなし。孔子が川上に在りて逝くものはかくの如しと曰ひける、孟子の、水の低きに就くを見て性善を知りたる、及び、耶蘇の、野に咲く百合の花を賞して天工を悟りたりし如き、是なり。故に、吾人若し靈心をして風蕭々たる夕に、千鳥鳴く河畔を行かば、必らず人情の切なるを覺えん。渺々たる碧海に臨みて默想し、輝々たる日沒に對して沈思せば、自から勸善懲惡の訓誨を得るならん。其他、宇内の光景、一として人道の源を吾人に示さゞるものなし。五條三位藤原俊成卿が、

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる

と詠まれしは、千万無量の意味ある歌なるかな。(卅八頁)、

加之、活用飜轉の才筆凡ならず、讀者をして意はず拍手賞歎せしむるもの多し。左の一理解と、其文とを見よ、

或は曰はん、風儀は恰かも四季時候の如く、推移循環止まざるものなれば、時勢の流行にさへ從はゞ別に是非の撰擇を要せずして可なりと。是れ大に誤まれるなり。夫れ四季の變更あるは天則ある所以にして、年々歳々不易の道を進むる也、何ぞ常なきと言ふべけんや。(四頁)。

要するに、本書は、近年世に出でし女學書類中の尤とも價値あるものの一つなるべし。惜ひ哉、言大躰に渉りて、細事に入らず、此の經驗深げに見ゆる長老婦人をして、更に仔細に訓ゆる所ろあらしめざることや。左れど、本書著述の主旨は左の如けん、則はち直ちに此書に就て求むべからず。他日第二の著あらんことを年少女學生の爲に望むと云ふ。おのれが殆んど五十年來經歷せし實驗を披露し、天下の諸孃に日本女子の思想を堅固にし、國の基は家にあり、家の本は女子にありと云ふに愧らざる女子となれかしと祈るのみ(八頁)。

●男女共學の得失(中)

◎兵庫縣西宮高等小學校

得、躾方の上に利益あり

失、分離せし爲め兒童數少くして數學年生を一學級として教授せざるを得ざることとなり授業生管理上の困難と不利益を免れず

◎長崎縣大村高等小學校

得、取扱躾方並に教授に關して女子に適當なる方法を執るに便なること言語擧動等女子の特質を保ち粗暴の風に陷らしめざること當地方の如き男女の別を重んずる所にては家庭の希望に適ふこと

失、活潑の刺激に乏しく智識の發達緩漫なる事臆病卑屈の風あること、同性內猜疑嫉妬の念幾分か强きこと

◎同、公立平戸高等小學校

得、授業上管理上躾方上女德涵養上等に利あり

失、知識發達上に關しては男性の刺激を受けざるを以て自然奮發興起の氣象に乏しき傾向あり

◎新潟縣尋常師範學校附屬小學校

不調査

◎同、市立新潟高等小學校

得、女子天然の優美なる淑德を養成するに益あり、修身、作文、習字、躰操科等女子に適當なるものを撰ぶことを得、男女互に優劣を競爭するの弊を除くことを得

失、別に弊と認むべきものなし但し一學年の兒童の數少なくして二學年以上の兒童を一學級として教授せざるを得ざるの場合を生ずるの弊あり

◎同、市立鏡淵尋常小學校

不調査

◎同、町立直江津尋常小學校

得、男女は其天性格段なる差異ありて一樣の教育を施し難し即德性上の訓練智力上の學課等同一の方法並に問題を以て同一の結果を望むべからざるは自然の勢なり然るに女子のみを教育するときは女子に適當なる訓練を施し學科を課することを得

失、女子は槪して多少の嫉妬心あり又互に私語するもの多し之果して其性質に出づるか將た男子と共學せざるが爲め生ずるの弊なるか其原因得て判明し難し

◎同、村立高城尋常小學校

得、女子天性優美の風を保ち教授の材料を撰び管理の嚴肅其宜しきを得るに便なり

失、認めず

爛煥

女性文學に就ての所感

森愛軒

誰か云ふ、紫女去て女性復た詩を成す能はずと。然り源氏五十四帖は斯の如くにして逝けり、然れ共記臆せよ、詩神未だ去らず人間尚ほ味ありと絶叫する「文學界」の志士ありしを。日本の女性は沈鬱の忘想に富み、悲愴の幻想に豐かなり。彼女は天地の上層に靈妙の存する事を究むる事切にして、下層に美妙のあるを忘るゝ、事久し天上人は巧みに彼の女が夢想に畫ける影にして默示の聲は彼の女か詩想を打擊したる注射（インスピレーション）なり。然れ共莊嚴なる山岳は未だ彼の女の詩眼に影を投ずる事能はず、華麗なる渤海は未た彼の女の詩腸に注射を與ふる事能はざりき。否な彼等は嬉々たる群鳥を聞かざるに非ず、然れ共彼等は鳥を以て基なき現世を送るものとなし、且つ己と等しく死後の樂國を有するや否やを想像し始めたり。紛々たる本草に接せざるに非ず、然れ共彼等は花を以て明（みやう）の嵐に散る者となし、且つ己と等しく生命の短きを歎つや否を研究するに至れり。浮世は夢の如く、人世は一種の幻影なりと是等の厭世的注解は、久しく浸掠し了せる日本女性の詩想をして最と悲痛鬱勃たらしめたり。故に日本女性の詩眼は黑雲蔽へるの月に注ぎ、日本女性の詩想は春天暖かなるの雪に射る。名媛たらんと欲し、淑女たらんと欲するの女性は一室に隱閉して、更に大なる社會的ホームを知るの動機を許されず。靈妙清淨泉の如き愛情は、世間狹き壓抑の爲めに泣き苦む、熱涙の爲めに、遂に乾燥卑猥なる肉の炎（ほのほ）と成て芳草の床を燒き盡くすなり。愉快と希望とに滿てる人世の好運を、悲痛慘怛たる煩悶の生涯と化し終らしむる交際的の束縛を受けたる者は、蓋し日本在來の女性なり。故に彼の女は此狹隘無味なる交際的眼球を以て觀察したる、極めて薄弱の而も單調の現象に、加ふるに憂悶的悲哀の爲めに變化したる一種の哀詩（ツラゼヂー）を作る女詩家とは成り果てたり。

花亂れ薰散り、蝶舞ひ鳥囀るの交際的現世の恩澤を蒙りたる女性は、一も二もなく鹵莽娘として擯斥せられ、彼の女の陰性＝憂悶悲哀＝の詩想は、非常なる親和力を以て陽性＝妙雅優健＝の詩想に密接せんと試みたり。然れとも此等の希望は、在來浸し了せる習慣の爲めに、凡て可憐徒勞に屬したり。彼等は萬斛涙裏に呻吟彷徨して、此單調の賀拜のみに、あたら天與の圓滿なる詩想を費したりき。是れ抑〻又女性をして沈鬱ならしむ可き人倫的束縛なり。

斯の如く、幾多の堪へ得ざる束縛に堪へんとしたる日本の女性は其詩想益〻狹隘となり、彼の女が消極的沈鬱の理想は、愈〻驚く可き方面に向て驚く可き境遇に交入せり。故に彼女の詩は至る處男性の詩に由て壓倒せられ、見へざる衝突に打ち敗けて終に今日に至ては全く女姓は詩を成す可からざるも

の丶如く思はしむるに至れり。

殊に彼の女をして最も悲む可き詩人とならしめたるものは、或る制限せられたる牢獄の中に投ぜられたる事にして、確かに或る意味に於て、社會の香しき風より奪ひ去られたる囚人なりしが故なり。彼女は旅行する爲めに足を奪はれ、自然を眺めん爲めに黒き眼鏡を與へられたり。彼の女は生れ出でたる地方の娘、只一小村落の娘にして、而して更に廣大にして雜多なる世界に就ては、如何に非常なる吸引力を以て觀察せんと欲するも能はさる所、縱令ひ海棉の水に於けるが如き、自然に感化せられ得可き能ありしにせよ、境遇は決して是を許さゞるなり。彼の女の眼中にある自然は奈何、單に或る山より出で丶或る丘に入るの太陽、或る松の老ひたる枝にかゝりて、或る杉の黒き木の間に靜かに沈むの月、一の峯より他の凄き谷に吹き込む風の外、何物をも知る事を許されず。彼の女か觸る丶社會は如何、單に一種の土音を以て語る村老と、童兒を聞き、同じ儀式を以て葬り、同じ祝言を以て嫁る結婚を知る事のみ、僅に許されたる所なりしが故に、彼の女に取りては、彼の女が知る一種の土音と、同種の儀式習慣の外、他に彼の女をして喜で觀察せしむ可き、思想上の、動機は存せざりしなり。自然を解釋し得る知識より云も、社會を説明し得可き能力より云も、彼の女を混雜なる土音の習錬より取り去りたる、言語上の不自由は、彼女をして只に可憐可愛にして、然れ共味ふ可き價値なき、單純無害なる詩を作らしむるに至れり。然り日本在來の女性の詩は眞に可憐可愛なり、何んとなれば、彼等は天與の圓滿なる詩想を、最も單純無害なる子兒らしき觀察に止めて、而して最も親交せる狹き範圍の土音を以て語り出したればなり。恰も是れ無害なる少兒の談話を聞くが如く、其語や天使の聲にして、其音や苔むす岩角を走り下る清泉の響きなり。

然れ共悲哉、彼の女の詩は決して深く養ふ所なく、多く觀察する所なく、廣く聞く所なかりしが故に、遂に天地の化を究極する事能はざりしなり。

要するに、彼の女は閑散孤獨なる生活の中に生長したる者なり。閑に居るものは必ず沈鬱に沈み易く、從て自個を以て宇宙の大法則に使配せらるゝものゝ如く想はしむるに至る。自個の脆弱なる碎け易き血氣の感情を以て、己が有する勢力の凡てなりと信し、此頼みなき小き王國に籠城して、而して激浪天を捲き、風塵地を覆へすの社會と戰ひ、戰て敗れ、戰て走り、遂に小く弱き城壁の内に退隱して、其處を以て自個の安せざる可からざる地なりとなせるものなり。

今若し彼の女をして、此社交的束縛より、人倫的壓抑より、旅行の不自由より、自由なる事を得せしめば、余は彼の女のモクサの如き感情が、自然の火に由て燃され、如何なる光輝を放て燃へ上るかは、豫め想像する事能はざるなり。恰も石に壓されたる「すみれ」の床の如く、幾多の情人をして迷はしむる薫と、疲れたる旅人を慰むる美とは宛然死せるが如くなりと雖も、一度是の苦しき重荷より自由を得て、綠深き夏の景色に一層の裝飾を添ゆるの時は、林も是が爲めに香はしく、

世界も是が爲めに樂しく、情人と手を携へて古き柏の木の下に樂しき會話を保つ人も、之が爲めに平和なるを得せしむるが如し。彼の女は兩性の中最も好く自然の火に由て燃さる可き情火を有し、最も緻密なる振動に耐へ得可き琴線とを有す、故に彼の女の目に觸れて天使の聲を成さゞる者なく、彼の女の耳に入て鬼神を泣かしむ可き、地の人の聲を成さゞるはなし。苟くも一たび彼の女の聲をして大ならしめんが爲めに凡ての堪へ得べからざる壓抑を徐く事を得ば、紅塵の巷に營々たるもの始めて閑天地に入る可く、雅量に飢へたる情の人も、無限なる香世界の消息を窺ふを得可く、平和に見捨てられつゝ砂漠の如き、心を以てる愛の人も、永遠に濁らざる慰藉の泉を呑む事を得可きなり。

彼の女の生涯は、嵓窟の間に在て冷き氷につゝまれたる梅の一枝の如きなり。彼の女が明るき世の中に向て香を放つ可き千載の一遇は、大蛇の鱗の如き黒雲の裂け目より、金の如き春の太陽を望むの瞬間なり。

嗚呼、日本の文界は阿孃の聲を聞かざる事久し。情の人愛の人は、壓搾せらるゝ如き心臟の苦を以て、慰めの詩を望む事切なり。ミユーズ一度足を琵琶の片田舍に止めてより既に十世紀、磅礴たる八朶の芙蓉、詩神未だ去らざる乎、果又詩神未だ來らざる乎。

夕日のなごり

花影子

夕日のなごり　くれなゐに
　東の山に　匂ひつゝ、
いともやさしき　そのいろに、
　つきぬおもひは　起りけり。
霧さけぶりに　つゝまれて、
　野べもしづかに　ねむりけり。
山にのこりし　くれなゐも、
　漸くきえて　あともなし。
あゝわが友の　世のなかに、
　のこせる愛も　ゆふばえの、
いろのごとくに　消えゆきて、
　いつか殘らぬ　時あらむ。
夕日は西に　おつれども、
　いづこの里か　てらすらむ。
名殘はこゝに　きゆるとも、
　いづこの山にか　匂ふらむ。
この世のなかに　わが友の、
　殘せるあいは　きゆるとも、
天津みくにゝ　とこしへの、
　父のみ胸に　匂ふらむ。

もしほ草

白衣子

○女の天職

瑞穂の國　たうさし
イザナギ　イザナミの尊
御鉾の　ゑたゞり　にぞ
おのころ島は　なりき
大八しまの　くにぐく
女神こそ　生み給へ
をみなの　つとめ　高し

天照大御神
かゞやく　日の　御姿
かぎり無き　御代の　春
此神をこそ　仰げ
世をゑろしめす　大慈
民をやすむる　大悲
をみなの　つとめ　高し

紫の　うるはしき
色も　香も　この式部
君が　やさしき　心
源氏の　五十四帖
おほいなる　いさほしは
ひかる君さ　消えせず
をみなの　つとめ　高し

鎌倉山の　月は
霜さゆる　阿佛尼
家のため　夫のため
身を　はふらかす　健氣
子らを　いさむる　情
深しや　十六夜日記
をみなの　つとめ　高し

玉かつら　うるはしきも
みどりの色　消きも
木にまさはでは　生きず
操さて　人のため
松の幹は　無くて
たゞ　たよるものならば
低し　をみなの　つとめ

雨に　なやむ　海棠
優にやさし　その花
風　吹かば　くづ折れん
美くしきも　色さ香
薔薇の　さげ　はなくて
たゞ　よわきものならば
低し　をみなの　つとめ

ここやみの雲　はれて
世は　あけぼのの　明治の
時こそ　きつれ　友よ
みなぎり満る　惡覺
はらひのけよ　我友
きよらなり　富士の山
をみなの　つとめ　高し

○誰かいふ

誰かいふ　月　心無しさ
春花　爛漫　東風　薫る時
駘蕩の白雲　靄々たり

澄みわたるよさ　見しも
靄々たる　楽しさ
うら恥かしき　花の
心の友し　あれば

誰かいふ　月　心無しさ
金風　蕭殺　秋花　凋む時
縹緲の碧空　寥々たり

澄みわたるよさ　見しも
寥々たる　寂しさ
麗はしかりし　花の
心の友は　なくて

○折にふれて　四首

和風　柔軟　洋面を弄す
頬上の微醺　胸中の漣

顧みて　笑ふ　人間　心臓の機
釋　基　の妙法　未説の處

我今　平和を得たり
　朱光　泰嶺を擁す
黄炎　緑野の蓮
　大地の　生命たり

谷深くして　巖老ゆ
可憐　百合の花
氣寒く　色孤なり
春光　和融
白變して　紅となる

情緒急迫　性管散漫
　一昂一壓　即不成調
瞬亮微妙　波及天地
　天降甘露　地咲香華
翡翠翔庭　鳳凰舞堂
　發成春色　収成秋晴
情性融和　不可思議
　莫作放縦　莫作畏縮
大千世界　總是生命
　搖之爲愛　放之爲理

〰〰〰〰〰〰〰〰

○戀

暗みの夜の　まぼろしか
有りとは見えて　消えつ
それとも分かぬ　浮世
只君と　余と　放れず

足元に立つ　双(さいば)
歩みくろしき　人の
身は　悲し　只愛に
結びてぞ勇まし　余等

道は遠し　沙漠の
空　輝き　地　燃ゆ
旅の心　世は無慘
獅子の木蔭　君は泉(いづみ)

白雲は　谷間より
湧ぎり起ろ　嶺(たうげ)
地(ち)も　見えず　天　暗し
手をさりて　進むは　二人(ふたり)

頼まれぬ　世間にも
涙　血を　ほぼるにも
左右(さう)わかぬ　宇宙にも
うれしかるは　君が　情(なさけ)

獨　いかに　生かまし
君なくて　春の日の
光も　くらかるべし
花散らば　余　はや死ん
秋の　草葉　あはれ
緑うるほす　露の
惠ある　君だにも
霜さならば　余　枯なん

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

朝な〳〵　照る日の
心の限(くま)も　曇らで
こゝとはに　榮えつゝ
契を懸(か)けん　大空(おほぞら)に

〰〰〰〰〰〰〰〰

○憫なる乙女心

月ならば
　春のやよひの　朧夜(おぼろよ)か
花ならば
　三つ四つ二つ　ちらほらと
うすくれなゐの　透肌(すきはだえ)
　えめる口もと　甘露の露か
雨か涙の　春雨に
　ぬれてぞなやむ　乙女子の
あはれやさしき　李(なし)の花
甘泉殿(かんせんでん)の　夜の夢
驪山宮(りさんきう)の　さゝめ言(ごと)
　心なき
夜半のあらしに　さへられて
　思ふ方には　ちりもせで
おもはぬ　衣(きぬ)の　裡表(うらおもて)
はからぬ途(みち)に　さそはるゝ
身の行末は　いざゝ川

せかれて絶ゆる　音信も
松の梢に　吹きおくる
風のまらせに　あてごなき
思をぞする　梓弓
　ひきてかへらぬ　一すぢの
矢竹ごゝろは　男のこさよ
　秋の末野の　をみなへし
あだなる名には　立たんさも
　野分にちりて　うせんさも
下ゆく水の　あらはれで
　やるせ涙に　くるゝのみ
心のまこさ　いつか　さて
　月さえ渡る　秋の夜に
鴈の翼を　かなしめご
　蘇武がためしは　もろこしよ
大和撫子　われは　また
　人には見えぬ　深山櫻の
重なる山に　へだてられ
　ひそむ淵瀬の　底ひなき
奈落の底に　落ちはてゝ
　忍ひぞいづる　その昔
ゆかし　なづかし　降つもる
　雪のこゝろの　溶けはせで
つらゝひ寒き　木枯に
　枯れん命の　はかなさも
此身ひさつの　秋の空
　いかに　怨みん　恨まん
口にはいはぬ　眞心を
　胸にこめつゝ　玉ぼこの
たぐらき途に　さまよひて
　きえん姿の　まぼろしや
かひなき　ゆめの
　　　　はやも　覺なん

御國の兵士

空花生

一、雲ふきおろす　鷲嶺の
　あらしのおさも　高からず、
くだけて吼ゆる　渤海の
　波音さへも　かすかなり。
わが勇ましき　兵士の
　筒のひゞきに　うみ山の
　　力もあはれ　うせにけり。

琵琶のうな原　ひろからず、
　ふじの高根は　ひくしさも、
二千年來　きたひてし
日本こゝろを　ふらせんさ
わが勇ましき　兵士の
　すゝめるさまは　うみ山の
　基礎ふるはむ　譬廬か。

二、こほる火筒を　てらすべき
　夕日のひかり　ちからなく、
篝火きえし　さよ中に
　さゆる月影　いさかなし、
わが　いさぎよき　兵士の
　そのまごゝろに　日月の
　　光りもうすく　みえにけり。

かすかに照らす　月影に
　ふる里びさは　うつれざも、
よはき日影も　かぎりある
　この世のおもは　てらせざも。
わが潔き　兵士の
　すゝめるさまは　永久の
　　闇よをてらす　光明か。

三、トラファルガアの　いさほしも
　波のあなたに　きえうせぬ、
ウオタアルーの　血の煙
　いづこの空に　まよふらむ、
わが健氣なる、兵士の
　ふるふ腕に　人の世の
　　歴史のさかえも　うせにけり。

人のたゝへし　いさほしの
　譽にのらずも　かぎりある
この世の歴史に　のこらずも
不義をたゞさん　それまでさ、
わが健氣なる　兵士の
　すゝめるさまは　万軍の
　　エホバの神の　御使か。

開書

○日本の姉妹に訴ふ

（其一）　國民の獨立は清潔の德にあり

謹啓陳れは此に封入致せる書は合衆國萬國婦人矯風會世界巡廻員ドクトルアシチル孃及びアンドリウ夫人より贈られしものに候爾女史はロンドン府に設けあるピウリチー、ソサイチー（社界の清潔を保持せんと務むる會）のため大に盡力せられし方々にて既に印度に於ては其事業により英政府の官吏及び其地に在る分營の兵士等に由て檢黴條例を廢止致すやう英國の法官をして覺らしむるに至り申候而して此の書は貴國（日本）の人民の前に提出致され度との依頼を以て妾等に送られたるものに候因て妾等は貴社が之を雜誌紙上に御掲載被下候事に因て貴國の人民の幸福のため好結果を得させ給ふ事を信じて貴社を煩はす事に候。付ては貴國に在りて貴國の青年の教育に從事せられ居る一人の外國教師が「國家に對する學識ある人物」と題して書せる一文より左の一節を御通讀被下度候其文に、

國家に對して學識ある人物の有すべき最も必要なる特性は清潔なる精神なり夫れ國民の清潔は一國の勢力と安寧とに關して最も緊要なるものにして不潔なる國民は決して獨立する能ざるなり見よ彼の有名なるロマは一度世界の女王と稱へられ當時敢て其權勢に敵する者あらざりしに非ずや然れど彼も國内の人心壞亂のため其無形なる强敵には敵するの力なく遂に其足下に倒るゝに至りしなり實に其國民の驕奢放恣好色はマセドニア及びカセージも曾て成し遂げ能ざりし結果を來しぬ是ロマのみに止らず何國に於ても皆然り外國の敵に優りて强きは邪心の勢力にて其國民の道德性弛緩の途に進みつゝあるの國は實に禍たるなり一人の不道德家は一國の强敵にてたとひ其人如何に愛國を大呼するも其聲や吹き過ぐる風の如きのみ軍營に於て熱心忠實に其技を磨き雪霜の苦を忍びて其術を錬るに由て發達せらるゝ勢力も幾多の國の呪詛たる酒客淫行者等の大軍には到底相當する能ざるなり然れば高尚なる教育の貴重なる感化を受し者或は自ら青年の訓導者を以て任ずる者の中斯る者ありとせば如何實に其不節操と恥辱とは言語に表す能ざるべし之に反して學識ある人々の免れ難き責任たるや無缺なる生活を以て一個人或は一國民の躰格智能道德上の基礎となすべき神聖なる德性の上に其重大なる感化を及ぼすべき事たる明白なり

次で米國に於て有名なる教師又記者をして知られ曾て日本へも渡航せしウイリヤムイーグリフイス博士が或る日本の一青年の事業に付て書せる書より一節を引用致し度候

彼は眞正なる基督教的武士の如く彼がピアロチー或は他の英國の記者が其欲情と誤解より出でし諂諛の言語を連れて日本婦人を誣妄せる書により其好色を恣にせんとて歐米諸國より數千の青年の來りしを見たる時彼の熱血は滿腔に溢れたり

諸君よ諸君は最初に掲げし一節により實に清潔は國民の安寧と存在とに緊要なる事を想起し又第二の一節によりて日本は既に公娼あるを以て萬國より惡徒が其欲情を充さんとて自由に且つ密に渡來し得る處となり居るの事實を追思し給ふなるべし。願くは諸君よ此の美しき日本國をして世界の妓館とならしめざるやう且つ日本の女性が世界の不潔悲哀嫌惡の通語となることなく清潔なる者の榮譽となるに至るやう御盡力被下度伏して奉祈願候敬白。

三月十一日　　上州前橋岩神村パミリー外

外國婦人數名

女學雜誌社御中

（其二）　悲むべき通信

拜啓陳れは妹等儀貴國滯在中は殊更厚き御待遇を給はり難有御禮申上候妹等は日夜貴國のため且つ諸愛兄姉が將になさんとせらるゝ大事業を成就せられむため天よりの斷ざる補助と勢力とを加へらるゝやう祈願致し居り候偖て妹等貴國に在りし以來常に切望致せし儀は日本婦人に加へらるゝ大害即ち多少全國婦人の名譽に關する事に付思考せし事又見聞せし事柄を委細御通知申上度事に有之申候其は別儀に無之諸愛兄姉も常に新聞紙上にて御存知の如く海外に於ける日本婦女賣買の事に御座候近來英米其他各國の放蕩輩が渡海賤業者に對して左の如き感情を以て日本婦女を好む事は一般の風習と相成候蓋は日本婦人は何事にても人より命ぜらるゝ事は其事柄の善惡を問はず速に從ふ事は他國人の比に非ざる故に有之候抑る

德國の婦女は自ら善事と認めたる時に非ざれば容易に從ふことなく或は善事にても自ら害ざる時は從はずして却て惡事をなす事往々有之申候左れど日本婦女に於ては事の善惡を問はず正邪の差別なく何事にもあれ望まるゝに任せ其命に從ふ事に由て彼等惡人の意を滿足せしめ又快よく彼等に從ひ望まるゝに任せて最も恐るべき惡事をも爲すことあり是全く外國の放蕩家が日本婦人を好む理由の一に有之候第二放蕩なる外國人等は嘗て日本政府をして最も忌しき賤業者のため一の法律を定めしめぬ此の法律に由れば賤業者は皆彼等惡人の便益のため其健康を保持せんため醫士より檢査を受ざるべからざる者と相成居り候以前は斯の如き法律英國の或る市邑或は印度香港シンガポール等各地に實施せられ居りしが斯る制度は淫を行ふも害を招くこと少なからしむるにより直接なる淫行奬勵法の如く相成候ものから英國及各地に於て暫時にして醜行男女の意外なる增加を見るに至り申候尙淫夫淫婦の增加は之に應したる惡病の增加を來し候事實發見致され候故英國議會に於ては殆二十年以前此の制度を廢止致すやう決議致し候まゝ最早英國に在る賤業者は強て檢査せらるゝ事無之候以後同議會は此の制度即檢黴條例は英國附屬の各殖民地にありても同樣全廢の旨命令致し候左れど印度シンガポール香港南亞弗利加等にては道德上の思想最も卑き官吏多きを以て賤しむべき公許妓館及娼妓檢査の廢止を拒む者有之候故政府は再三之を訓令するの必要有之候因て彼等は近來に至ては甚だ狡猾なる手段を用うるに非ざれば斯る隔地に於ても英國の制度を犯すことの困難なるを感し居り候印度香港シンガポール等にては印度及び支那の婦人等は追々此の制度を知り檢査を拒絶致し候故官吏も强る能ざれば其地に在る放蕩者は益々大金を投下て日本婦人を購ひ出すの窮策を案し居り申候彼等は第一日本婦人は從順にして命ぜらるゝまゝに檢査を受候事第二日本婦人は本國に於て檢査に慣れ居り候を以て自然に檢査を拒むことなし惡徒をして密に政府の禁を犯すに便ならしめ候等の二個の理由を以て日本婦人を珍重致し候例せば英國派遣の官吏が本國政府の命令に依りて檢査は隨意たる事を賤業者に布告致し候や否や凡ての娼妓は殆皆檢査に行くことを停止致し候にも拘はらず獨り日本婦人のみは依然として止ることを無之候現今シンガポールには一千八百人の娼妓ありて中百五十人は日本人にして餘は殆皆支那人に候而して檢査の隨意たること布達せらるゝや支那人の檢査に就きし者三人に過ぎざりしに日本人は十五人有之候由是實に一千八百九十一年の事なり又一千八百九十二年七月の報告に由れば檢査に來りし者二十二人の娼妓の中日本人十二人歐羅巴人一人支那人八人マレイ人一人にて有之候一千八百九十三年一月の報告にては隨意に檢査に來りし二十八人の娼妓の中二十三人は日本婦人にて有之候由英政府より派遣せらるゝ殖民地の醫士即ち香港のドクトルエーアルスより殖民地書記官に宛て送りたる書中ドクトルエーアルスは(日本婦人は檢査を受べき制度ある事を望み申候如何となれば彼等は本國に於て此所(香港)に嘗て見ざるほどの嚴重なる檢黴條例の實施に慣れ居り候故に彼等は屢々余の退院せし後病院に來りて翌日余より診察を受るまで相當なる手當を施されたしと主婦に乞ふこと有之候)と申され候由に御座候

ストレートセトレメントの近邊なるピラクに於て妓婦に關する事務を取扱へる官吏等は檢査を命令的ならしめん事を請求致し一千八百九十一年九月に殖民地の書記官に向て左の書面を送り申候(マレー婦人は公娼(檢査を受べき者)となるや否や從來の生活を止むるか或は其縣外に移轉致し候支那人に於ては斯る命令は彼等を此國より立去らしむるに至るかの恐ある程に候左れど日本人に至ては隨意に命に從ひ困難を與ふること無之支那人より遙か取扱ひ易く候)此等の事實は殖民地の官吏が英政府へ書き送りし書面より寫し取りしものに候此の事を申述し候は諸兄姉が明かに此等は單に妹等のみの說に非ずして法官も之を識認致し候事を御承知に相成且つ現今貴國に於て賤業者のため設けらるゝ制度は賤業者が本國に於て檢査に慣れ居り候故隨意に檢査を受又容易に惡徒の處置に從ひ候を以て何國にても日本人のある所にては密に檢査の組織を保存し得るやう相成候を以て却て他國の娼妓に適せしむるに至り候事を御理解被下れんが爲に候

偖て日本よりつれ行れ外國諸港に於て妓館に賣られし者の數は聞く所に由れば左の如くに候

ボムベー	三十八人
カルカッタ	二十一人
ランガーン	百廿一人
シンガポール	百五十八人
ピナング	九十人
香港	六十人

此の調査は警察官の調によるものに候へば確實なる數には有之間敷候警察官は屢々其事務を怠りて充分なる調査を致さず候故恐らくは此統計に入らざる數多の者可有之候

合計四百七十九人

此の外尙ポートセードマドラスモルメーンマシダレー上海ピラデパスタツク及びカナダの太平洋に接する海邊等各市に於ても日本婦人有之候曾て其良人さ共に東京其他各所にてメソデスト教會の宣敎師さして働き居られ當時桑港に設けある日本人のためのミツシヨンに於て監督の任を取り居らるゝフローラベストハリス夫人の申さるゝには當時桑港及びカリホルニヤ間に於ける日本婦女賣買は全く停止致されたるにより當時桑港の妓館には一人の日本人も無之候此の大事業は桑港在住の日本基督教青年が日本領事の補助を得て成し遂げたる事に候さ

又ストレートセトレメントの一千八百九十一年度の戶籍表より次の事實を了知致し候一千八百八十一年間に其國に在りし日本人は男十二人女十四人なりしが一千八百九十一年には男六十一人女二百六十四人さなり中十五歲以下の者は十三人に過ぎず故に三百廿五人の日本人中子供は只十三人のみなれば結婚し能ざる者許多あることさ明白に候尙同年攝政官の報告する所を見ればピナンヶさシンガポールさの二市に於て二百四十九人の娼妓有之候由因て二百六十四の日本人中正當なる婦人は十五人に過ぎざる事を確知致し候未た其中にても疑はしき者多く有之候其は同國の他市に於ても日本娼妓有之候事は聞き及び候抑ゝ斯く不良なる日本婦人の多く外國に參り居り候上彼の惡徒等は此等諸國へ賤卑なる日本婦人をつれ行く事を喜び居り候ものから未だ一度も日本に渡航し其實情を見知らざる人々は一般に日本國には一人も高尙善良なる婦人あらざるものさ信ずるに至り候是實に日本婦人全体否全國民の名譽を損する事に候誠に日本國にある善良なる日本婦人のため並に全國民のため中外諸港に行はるゝ日本婦女賣買を全く廢止せられざれば日本國のため甚しき不名譽さ存し候シンガポールに在る善良なる日本婦人の友人より聞き及び候には彼の婦人は該地に於て日本服を着用し或は日本人なる事を口外致し兼候由そは外人は日本人さいへば皆娼妓なりさ思ひ居り候故なりさ凡て人類は自己の目擊せし所のみを以て萬事を推測致し候故多くの人々は「日本には一人も善良なる婦人なし余は多くの日本人を見たれども皆惡しき者のみなりし」さ申候勿論かゝる者は思慮なき徒にして自ら日本に來り日本婦人の實情を見るに非ざれば日本人に關して萬事を知りし者さいふ能ざる事を考へざる者に候妹等は基督に於ける日本婦人の姉妹さして男女に係らず日本基督信徒諸兄姉に切望致し候第一日本婦人をして外國娼妓に適せしむる制度即ち日本國に於ける公許妓館の設置さ公娼の檢査さに關する制度を廢止せられむ爲に務むる事第二既に熱心に着手せられつゝある如く外國妓館に日本婦人を賣渡す事を停むる事（妹等は新聞紙上にて既に此の點に於て着手せられつゝある事を拜讀し欣喜に堪へず候）第三女子をして彼等に命ずべき權利なき者に阿從せざるやう且つ神に對して罪を犯さしめんさする者には斷じて從はざるやう敎訓する事妹等は既に各國巡視中に見聞せし所の婦女の卑賤なる有樣に關して明かに事實を擧げて表白致し候妹等は此の英國の國會議員の前に此事を提出致し議會に多くの證據を與へき然れさ此の點に於ける此事業は未た成就致せしには無之妹等は英國附屬の隔地を支配致さるゝ殖民地事務大臣リウポン卿に一度對面致し又々近日對面せん事を期し居り候斯の如くにして國會議員は妹等の事業に大なる贊助を與へらるリウポン卿さ共に香港シンガポール各地をして此等の事に關する良き政治の下に歸せしめんさ期望致し居り候我等は英國をして其義務を遂げしめん爲には此の世に於てなすべき事は如何にもしてなさんさの決心に御座候尙貴國の諸兄姉は其必要に應じて日本語に譯せらるべき英文の書籍を充分御所持の事さ存し候此等の書類は檢黴條例即ち妓館を免許し賤業者をして檢査を受しむる制度は二個の緊要なる點に於て失策なる事を示し候第一制度は疾病を停止する能ざる事第二制度は淫惡を奬勵する事

日本國にある諸愛兄姉が此の事業に於て婦人矯風會さ共力してピカリチーソサイチ（社界の清潔を保持せんさ務むる會）を組織せられんことを深く希望致し候此の設立せらるゝに於ては諸兄姉に助言或は書類等を贈與せらるべき英國に於ての有力家を御紹介可申上候此等の人々は既に英國に於て大なる成功を奏し今又印度香港シンガポールに於て同樣の事業を致され居り候終に臨みて諸愛兄姉が凡て取らるゝ公義の事業の上に天父の優渥なる祝福あらんことを奉祈願候

萬國婦人矯風會第三第四世界巡廻員

エリサベスアンドリウ（夫人）

ドクトル ケート シープシチル（孃）

追伸日本諸兄姉中此の社に究英國へ直接に交通なさんさ望まるゝ御方は英國ロンドン府ウエストミンストルキングストリート一番フオセース孃さ御宛名被下度候

日本諸兄姉御中

片々

●源綱紀氏未亡人

日本速記術の發明者源綱紀氏は、辭世四首を遺して、長逝せり。

皇天有レ命可二如何一、三十餘年夢一過、滿腹壯圖猶未中、願留二魂魄一護二山河一。

此まゝに眠る命は惜まれど尚は思はるる國のゆくすゑ

國の爲めはかりし事も泡雪と消ゆるも如何で忘れやはせん

死するとも忘れがたきは國民の行末いかに成ぬ可かな

此の志士に後れたる未亡人樂子は、多年の内助一方ならず、困戀の中に家政を整え、常に夏人をして後顧の憂ひなからしめたり。或時ば、大坂の東雲新聞に記者たり、又或る時は盛岡の女學校に教師たり、東奔西走して屢ば黨黨同樣の樂みを割きながら、十年一日の如く、常に能く奉仕して夏人が志を成さんとせり。此頃ろ、樂子が某氏に寄せられたる書中に、

此度の死別は意外の事にて殆んど盲龜が浮木を離れし如く存候此迄も御承知の如く綱紀の性質として少しも餘金あれば直ちに公共の事に擲ち一家の經濟などは一向に無頓着にて……只茫然涙さへ出す全く精心を取失ふ程に候へ共又よくよく思ひ候へば昔しの人の殘されし名句に

憂事の尙此上につもれかし限りある身の力ためさん

との言葉は小妹が肺肝に收むべき時と存じ決して愚痴をこぼし女々敷涙を落し歸らぬ事をくりかへす時ならずと存じ進て綱紀になり代り年高き老母をして安らかに餘命を送らせ前途永き小兒を教育しつゝ迄も源家を立ゆくこそ死ぬへのつとめ姑への孝と私は决心いたしました其决心と同時に私は鬼の如く心を強めました其後は人に向ても涙一滴落しません只々暑後熊斗りな胸に考へました然し乍ら人にして涙なからんや殊に婦人の特性たる涙なからむや然し小妹の暗涙は人の知らざる涙なり人に生れ何れか早晩死別無からん小妹は死別愛情の爲に落す涙にあらず顧みれば綱紀は病氣に冒されし以來實に十二分の介抱治療の手落なく死者も此一事は滿足を以て此世を去りたり然し殘念なるは死者滿胸の計畫未だ中に達せず空しく地下幽冥の客となる死者の心事を思ひ來れば轉た悲涙の止まる所を知らず小妹が涙は此　事を追想する時に出づる也

●婦人新報新に出づ

前婦人矯風會雜誌の代として、婦人新報第一號出づ。目次は本號廣告欄に見ゆる如し。事ばら婦人方の手のみにて成れる此雜誌の如きは他にあるまじ。今後婦風事業の大に起さゞる可らざるは人の普れく知る所也、左らば諸人愛顧して此の雜誌の發達に助力せよ。

●一葉女史

近年文壇の女秀才に新らしき名一ッ加はりたり。一葉女史これ也。「青年文學」第二號、この事を記して云く、

數ふれば早や三年餘りにやなりぬべき、一葉女史なる名は、花圃女史の紹介にて、初めて『都の花』の紙上に見はれたりき。新作者を冷遇する文壇の常とて、餘りに世の注目を惹くに足らざりしが、『文學界』出づるに及で女史の新作を屢々その紙上に見受けたり。然れども未だ、さしてこれといふべきものも出でざりしに、此頃に及びて女史の筆の鋒に一進歩ありしを見るは可喜。十二月の『文學界』に出でたる『大つごもり』及び一月の『たけ競』(未完なれども)等は、元祿体の輕妙なる語調に、さすがは女の、纎細なる觀察を寫されて、時に今一息と思はるゝ節なきにあられど、何にしても近來の傑作中に數ふへし。近時文壇の閨秀中小金井、若松兩女史は、共に反譯に於てその伎倆を示さるゝのみにして、未だ創作を出されず。これあるは唯花圃女史のみ、而かも頃日、杳として其音信を聞かざるもの久し。一葉女史が創作の才に富める、奮ふべきの時實に今日にあるなり、女史たるもの勉めざる可けんや。

◎愛の沈默　眞正の沈默は思想感情の默示たるなり、言語は口より耳に語る感想にして沈默は心より心に傳ふる思想なり。愛の極まる所ろに大なる沈默を發見す敵を愛すべしと敎へ玉ひしキャリストは己を迫害する彼等をして如何にもして多くの罪に陷らざらしめんとの聖愛より沈默を守り玉へり。大聲は大なる感情より發し無聲は無限の感情より來る。天の靈と相感通する聖者は多く沈默の愛を以て其愛を人の心に押込む。と岡山基督敎、メール新聞に出づ、嘖々其善行を賛し且つ曰く、十二年間一回も缺術なしと。

◎帰婆西尾京子が事、メール新聞に出づ

◎全國醫師の數　は二十六年末の統計にて、三万九千六百〇一人（醫學士は千四百二十八人のみ）なれば。人口一万人に付、九人、五七なり。

◎一藝に達するもの皆な道あり　桃川如燕、新門弟に喩して曰く、席場を大事に勤め高座を戰場と心得、衣類其他は鎧兜にも心得、どの樣な苦しみが起らうとも、講談中は戰場と心得一歩も下らぬ樣に、倒れて死ぬるともやめぬ樣に、喇叭卒の白神源次郎と云ふ御方は、息の絕る迄で喇叭を吹て居られたとの事、是れ實に何の職にも夏い手本、我々どもは言ふ迄もなく其心得で居なければならぬ。如燕など

は、死まで修業だと心得て居ます。家康公が御側に掛けて置れた御掛物は「油断大敵」、人間油断をするのは一番怖い。

◉統計學の名家杉亨二君　曰く、バックルは男女の產出數を同一なりとしたれども之れ固より粗笨の調査にて實際上男の產出數は遙に女に踰ゆると雖とも結婚年齡に及ぶ比ひ大數漸々同一に至るの傾を示すものとす是れ從來道理より事實を見たる想像法に反して事實の上より道理を觀察したる實効にして實に學問上に一新生面を開きたるものと云ふべし之れ今より僅に百五十餘年以前の事とす此に於て始めて一夫一婦に對する非難は漸やく迹を隱し加之此等婚姻上の調査は又賣淫と離緣とは互に正比例をなし賣淫女の增加するに從て離緣も亦多く離緣の增加するに隨て賣淫女も亦增殖す。又、賣淫の弊は自殺を增長せしめ、又私生兒は不健康のもの多く痴愚のもの多く自殺其他種々の罪を犯すものも亦多く及び　毒の蔓延する恐れも多し。

◉宗教的情死　基督教徒が基督に對する愛の爲に己を捨つるを稱して宗教的情死といはんと欲すと。「世光」の記者は言へり。

◉日本の家庭　家庭の和樂は獨り歐米に存して我國にあらざるにはあらず、其眞に和樂する狀に至りては、世界万國恐らくは我國民の如く相和樂するものはなかるべし。近時家庭の和樂を說くもの多し、是れ亦尤もよし、古來我風俗として有する家庭の和樂の上に更に一層の和樂を注がば善美に大なりとす。唯、和の極は狃に至る、狃の極は亂に至る（少年園）。

◉尤とも有効なる下等婦人　なり。下等社會の婦女は尤も多く國の爲に益を爲す、上等中等社會の婦女は遠く之に及ばざる也。昔し太宰春臺は、大名の奥方の奢侈にして婦人の務を爲さゞるを太たく罵しり、世界に無用の物は大名の奥方ほどの如きものなしと云へり（西村茂樹氏婦人弘道叢記）。

◉救世　第一號出づ。島貫兵太夫氏が發行する所ろ。眞實慨切の文。語短く意長し。

◉金玉均未亡人遭難自記　なるもの三月七日の時事新報に見ゆ。可憐、涙落つべき經歷なり。今や錦陵尉大監（朴泳孝）の家に寄寓して身安きを得、國政一新して亡夫が心正に成れるの時にあひ乍ら、亡夫は則はち無し、只だ一幼女を片身に愛護して切めてもの慰さめをなす心ばえこそ哀れなれ。

◉朝鮮婦人日本に來る勇ありや　と題して朝野新聞は報ずらく、仁川にある日本郵船會社支店支配人久保扶桑氏は、朝鮮婦人を世話して日本に連歸り、日本婦人

が家庭を修理する眞相を見せしめて其女德を養はんことを希圖せらると。

◉熊本市の高等小學女生　が就學多からざるを歎き、理事者は管轄各學校に訓令を傳ふるに至りたり。聞く、尋常小學に於ては、第四學年に達してすら、四割七分二厘八毛は女生なるに、高等小學に至れば遽ドて二割二分三厘二毛に超えずとぞ。

◉世界一週の自轉車婦人　曩に本誌に記載せしロンドンデーリー女史は舊よ去一日香港より入港のシドニー號にて神戸港に着したり。

◉蠶を朝鮮に養はんとす　奥村五百子女史曩に韓地に航し朴泳孝に面會して其所有地を借入れ大に養蠶をなさんと謀ドけるに朴氏喜んで快諾せしかば、女史は歸朝して工女五百名を募集しつゝあり。

◉東京慈化院女子部　新築せられんとす。

◉女性の文學　國民新聞論ドて曰く、女性文學の弊習ては生硬に失したり、今や一方の極端より一方の極端に至れり。夫れ源氏物語、枕草紙の和文は、遽ド難きと學ろ平易なる英文よりも甚し。其の日本今日の思想に適せず、實用に適せざるや、名は和文と稱するも、殆んど日本文と云ふ可らざる也。人、太平記の文を評して古今の名文と爲すものは、其の和文と漢文との調和の程度宜しきに適へるが爲にあらずや。源氏物語より平家物語、平家物語より太平記、太平記より時文、是れ文學發達自然の順序也。何等の妄想子乎、今日の時文を源氏物語時代に引き返さんと欲する乎（三月十四日）。

◉埼玉縣下の存娼論　は正義の反抗によりて消滅しゆかんとす。感謝すべき哉。近頃ろ該縣警部長より各警察署長へ內訓あり。又川越にては、新設論などの起るは料理屋の風儀惡しきが故なりとて、內訓あり、彼等も垣根塀などを高くし酌婦の取締一層嚴重となれり。これ存娼論の起りたる反對の好結果なび。

◉女がみゆひ　新馬鍛錬の當世百面相、髮ゆひ女のくだりに曰く、兎角浮世は飜次第、腕次第世の男女同權論者とやら、まあ〳〵ちつと私等の世帶を見そなはせ、金殿玉樓に住はるゝ奥様嬢様と呼ばる人は、私は口には賞めそやせど、心の中には抱腹絕倒、つらこそのつぺり衣服こそ美なれ、皆これ白樂天の長恨歌に所云る百年苦樂他人による、亭主の腰がぢり、私等のやうに年が年中忙がしく、油汗を流しつゝ錢をもうけて亭主に臆をがぢらるると、女の見識はこれいかに、之ぞ世にいふ人魂と下駄ほどの違ならずや。

◉朝鮮婦人の交際　元來朝鮮婦人は男子に面會することを爲さず門戸の外一歩も出ることなかりしが當地警務署長夫人令孃は此程領事夫人を訪ひ種々の談話をなし歸れり元來當地は朝鮮國中にて最も早く文明の空氣を吸ひし所にして婦人の交

際も亦恐らく當地を以て嚆矢と云ふべきなり（漢城新報）

◉東萊に女丈夫あり　東徒中に一美人あり芳紀二十二容色城を傾くの美色あり名を李召史と云ふ久しく東徒の間に奔走し長興府を燒きたるときの如きは彼れ馬上にて指揮し居れりと云ふ。曾て夢に天神現はれ古錠を與へたりと見る東徒皆な尊むで神女となせり。然るに長興の一敗韓兵に捕はれ今や同地の鐵窓中に在りと云ふ。

◉女子不就學の原因　左に掲ぐるは信濃教育會下水内部會の調査したる女子不就學の原因並に其奬勵法なり。

一、心情に關するもの
(1)父兄女子教育の必要を感ぜざること
(2)教育の誤解

二、事情に關するもの
(1)子守
(2)家政
(イ)貧　資料に乏しきこと出稼人となりて居ること
(ロ)家業傳習　裁縫　糸取
(3)家の階級の適當
(4)小兒卑怯心より出ること

右に處するの方法

一、間接的奬勵法
(1)幻燈器械を使用して教育談話をなすこと
(2)農談會又は他の好機會を得て説くこと

二、直接的奬勵法
(1)貧寠の者には授業料を免除し器具を貸與すること
(2)教員自ら奮て是れが弊を矯め説明すること
(3)最寄の生徒をして誘導せしむること
(4)裁縫科を置き之を擴張すること

◉歌舞伎新報　暫らく休止せし此の新報、千六百十號より全く一變改正して出でたり。なか／＼に面白し。

◉漢城新報　なる題にて朝鮮京城より隔日發行の新聞出づ第一號に曰く、京城の日本居留民八百八十人、内、女は三百五十人。

◉一年間吾少女の研究　一月の教育評論（Ednentional Revew）に二十頁の長論文あるは、ナスガル、クリスマン夫婦が、其一少女が一歳半より二歳半に至る一年間の發達を精密仔細に研究せし結果を述べしにてある也。智慧の附き方、謂はゞ習ひ方進歩歷々觀るべし。兎角西洋人が氣長に、綿密に、熱心に、物事を研究するは感服すべし

◉英國女王がビーコンスフヒールドを酷信せし所以　何處にありやと、近頃ろブレツト氏は十九世紀雜誌に於て精わしく記述せり。曰く、故宰相が、女性に對する深切の尊敬、朋友に對する温かき友愛とは、女王陛下の類ひなき信任を厚くせし大元因なりと。

◉萬國幼兒保護會　は本年六月佛國パリ府に開かるる監獄萬國會議に引續き伊太利フロレンスにて開會せらるべし。

◉子供の研究　三月の大日本教育會雜誌に、黒田定治氏が子供の疑問に付ての演説筆記あり。ピードロザーの研究に關し有益なる論文とす。曰く、亞米利加の今の教育社會は、兒童の研究に狂奔して居ると云ふも宜しき程なり、而して殊に女子が骨折りつゝありと。

◉平安女學院設立　同院は本紙の廣告欄内にある如く今回京都市烏丸通下立賣角に新設せられたり正面の宏大なる煉化造の建物は教場なり寄宿舍は日本造にして空氣の流通よく食堂浴室等の設あり頗る便利にして殊に衛生の注意充分なるが如し教育は家族的制度にて一階級に數十人の生徒を入るゝの弊を避け小數の生徒を親密懇篤に教ふる目的なれば生徒の定限ある由

夕日影　（第三十二頁）つゞき

四、流れつきせぬ　ヨルダンの
きよき眺めも　たへならず、
縁りしたゝる　レバノンの
峯の香柏　いろもなし。
わがかぐはしき　兵士の
血しほの花に　天地の
色香もたえて　うつろひぬ。

空さぶさりに　野の花に
自然（かみ）の美妙は　しらずとも、
散りゆく花の　命運に
すつる命（いのち）は　おしまれど、
わがかぐはしき　兵士の
すゝめるさまは　カルバリの
峯にちりしく　夕露か。』

（二月十五日稿）

太陽

紙數二百餘頁　**第參號**　三月五日發兌

挿畫（寫眞銅版）
●故有栖川宮殿下●近衛篤公及公爵●大山陸軍大將●栗本鋤雲翁並橋立艦●巴格來大教堂並主教●櫻花双鷄の圖（川端玉章筆）●京都博覽會並大極殿●英京倫敦市街の圖

◉論説
●文明併呑論を評す……犬養毅
●文學上の新事業……大西祝
●戰後（下）……千頭清臣
●征清後の教育を論ず……藤澤南岳
●國際公法上軍隊安全の權を論ず……日下部三九郎

◉講演
●足食民信之矣……谷干城
●宗教と美術との關係……黑川眞頼

◉史傳
●有栖川宮熾仁親王殿下……大和田建樹
●加藤清正……小倉秀貫
●彰義隊……曳尾叟

◉地理
●天津港……曾根俊虎
●京都の新案内記……紫明樓主人

◉小説
●吾妻錦繪……須藤南翠
●昭君怨……漣山人

◉雜録
●川田甕江……依田百川
●字音の標準……三宅雪嶺
●美文と歷史との間に一線を劃す……石橋忍月
●明詩の我邦に關する者を論ず……野口寧齋
●帆足萬里の文章論……關旭巖
●しら學物語……落合直文
●新聞小説……窓下九上生

◉文苑
●漢詩……股野藍田外十名
●漢文……龜谷省軒
●和歌……東久世伯外廿七君
●和文……井上毅外一君
●長歌……本居豐穎
●新體詩……湯淺吉郎

◉藝苑
●能樂……大和田建樹
●日本の音樂……宮島春松
●古今演劇談……幸堂得知

◉家庭
●比斯馬克侯爵夫人ヨハンナ……日〇生
●容儀雜則……修卷生
●改良着物干●米國婦人

◉政治
●日清兩國の海軍實力●北洋水師の名譽●日清開戰の利害●清國外交の將來●李鴻章●賠償金●山縣大將●第八議會●朝鮮の王室典範

◉法律
●ボアソナード博士の祖邂……●博士ロエスレル氏逝く

◉軍事
●嗚呼大寺少將……寶軒生●威海衛の陷落●聯合艦隊の運動

◉文學
●韻語陽秋……謫天情仙
●明治詩家評論……大江敬香
●脚本改良會●文界雜俎

◉美術
●橋本雅邦……岡倉覺三

◉宗教
●愚禿親鸞……大内青巒
●教事些語……巖本善治
●救世教大道長安師●朝鮮の佛教●教界雜俎

◉醫事
●林洞海翁●北里博士の傳染病研究所●坪井醫學士の歸朝

◉商業
●園田孝吉氏の經濟時事談●食鹽の清國輸出●外二項

◉社會
●平安遷都紀念博覽會●故有栖川大將宮御葬儀●忠熙公

◉輿論一斑
●丁汝昌自殺問題●海外彙報●海內彙報數十件

英文（數十項）マスター、チフアーツ　神田乃武

定價
一冊（大判二百餘頁）金拾五錢●三冊前金四拾五錢●六冊前金八拾五錢●十二冊（一ケ年分）前金壹圓六拾五錢●郵税一冊二錢◉毎月一回發兌

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

登錄商標



米國專賣特許

○米國に於て近世の一大發明全世界に高評博したる醫學博士ペリーデビス氏の方劑

ペインキラー

○發明製藥所米國ロードアイランド州ペリーデビス會社

効驗の神速なる服用後僅か**三分時間**にして驗き始む若し功能なき時は**代價**直に返上す

主治病名

風邪。熱病。痢病。胃病。下痢。痔疾。たむし。打傷。歯の痛。頭痛。筋骨の痛。僂痲質斯。其他内外諸病に奇効あり

定價 大瓶五十錢 中瓶二十五錢 小瓶十錢

郵券代用苦しからず送貨大瓶六錢中小瓶四錢

其他舶來化粧品種々澤山あり升

日本全國一手發賣元

東京銀座貳丁目

いろは堂

特別販賣店

京橋銀座 岸田
日本橋瀬戸物町 玉置
日本橋兩國 大木
同室町 資生堂
同上槇町 安川
牛込上宮比町 尾澤
四ッ谷大横町 永田

米國に於て海陸軍の御用藥**ブランドレス膏**は既往**三十年**間の經驗により其**効顯**甚だ著大なり今や各國到る所に於て賞用せられ且各醫學博士の**有効保證**の患者**禮狀**も數千の多きに昇れり近く前五ヶ年の統計を見るに此の膏の賣捌きたる延長**二千哩**以上に達し之によりて**治癒**したる患者の數は實に**二億万人**に下らず

登錄商標

ブランドレス膏（氣孔付）

北米紐育ボーラスプラスター會社製劑

定價一枚
一金三十錢
一金十五錢
一金十錢

主治病名

僂麻質斯、インフルエンザ、腰痛、背部及**肝臓**に於ける**打痛肩**の**凝り、痰咳、風邪**を癒し**筋肉**の**疲勞**を**補**ひ且如何なる**強痛**も其局部に貼付せば立處に**愈**ること**確實**なり●幾日間貼用するも害なく却て保癒の効あり又再三使用するの便利あり決して遲疑重症に陥る勿れ ○氣孔付膏などゝ唱ひ僞物販賣する者あり商標に御注意あれ

●女生徒募集

今般春期始業各級入學を許す志望者は來四月十五日マデニ申込ムベシ尋常及高等小學卒業ノ者ハ無試驗ニテ相當ノ級ニ編入ス
併セテ英語專修生ヲ募ル○規則書所要ノ者ハ郵券二錢ヲ添ヘテ申込ムベシ

東京築地新榮町
立教女學校

横井時雄君著　大西祝君序
我邦の基督教問題

定價金廿八錢
郵稅金四錢

近年の宗教書中世人の注意を惹起したること本書の如きは稀れなり、好評あり冷評あり讃辭あり駁論あり區々一ならずと雖も、以て世人が如何に今日の基督教問題に着眼するの深切なるを知るべし、今批評の二三を左に抄錄す
我邦に於ける基督教の將來は教內の人は勿論教外の人と雖も大に留意すべき問題なり本書は宗教界の傑、横井時雄氏が此問題に關して平素の蘊蓄を吐露したるもの也（經濟雜誌）
（前畧）此書は渤卒の理論なるに係らず流麗秀峭近來の好文字なり就中第八章以下は本書精神の寓する所にして文辭も亦一層の光彩を現す（山陽新報）
（前畧）論評の公平なる現在せる新思想を畧ぼ代言せる所見の簡潔なる文章の典雅なる等に於て吾人は此書の優所を識認し其公版せられたるを歡迎す（女學雜誌）
（前畧）本書亦基督教革新の已むべからざるを說く者其論旨金森氏に比して一步を進めたるが如し想ふに又基督教社會の一大波瀾を惹起せざるを得ざるべし云々（東京日々新聞）
（前畧）我國に於ける舊教新教傳道の歷史を敍し其成敗の跡を詳にせらるゝ所及び最後基督教傳道の章の如き吾人を益する所少からず吾人は喜んで之を讀者諸君に推薦せんと欲するものなり（同志社文學）

松村介石君著
人物論

定價十錢
郵稅二錢

斯書は孔子、横井小楠、大鹽平八郎、十九世紀の豫言者フレデリック、ロベルトソン、等が人物を擧げ來り如何に彼等が天道に安んじ人情に動きたるかを說き去り以て大に今日青年を啓導せんと欲するもの、其文の豪快なる、其論の凱切なる、今更贅告するに及ばざるべし

發兌所　東京新橋出雲町　警醒社書店

護教

一部二錢五厘　三ヶ月郵稅共三十五錢
半ヶ年六十六錢　一ヶ年一圓三十錢

吾人は神を信じ、神にして人なる基督を信じ、人の中に行る聖靈の活動を信じ、教會の感化を信じ、人の品位と權利とを信じ、贖罪を信じ、永生を信じ、吾人の期する所は此信仰を日本人民の中に植へんとするに在り、過去も此目的を以て進み來れり、未來も亦此目的に因つて立たんとす
今や我精神界を顧みるに異論百出、人皆岐路に迷ふ、是豈吾人が筆を載にして、起つべきの時に非ずや、此目的を達せんが爲めに、吾人が現に爲しつゝある所左の如し、
精神界目前の狀況を詳序し、其大勢を推論すると、（之れが爲めに日誌、神儒佛、通信、批評の欄を設く）
精神界に於ける吾人の立場を明にし、吾人の信ずる基督教理を主張し、辨證すると、（之れが爲めに靜思、社說の欄を設く）、
讀者の爲めに基督教的知識を供し、併せて家庭の敬虔を助けると、（之が爲めに雜記史論、家庭の欄を設く）、若し夫れ議論文章、敢て人後を逐わず、自然に自から一種の特色を有する世既に公論あり、吾人必しも自ら喋々たるを要せざるなり、
左の四名は本紙の編輯に從事す　麻布霞町十八番地
山路彌吉　客員　竹越與三郎　水上梅彥　工藤陽太郎

○蜂印香竄葡萄酒廣告



滋養第一之飲料

蜂印香竄葡萄酒は本邦葡萄酒の鼻祖にして其質醇良能く何人の口にも適し第一榮養分に富み胃弱より生ずる諸症衰弱貧血脳病氣鬱等に用て特に効驗あり壯者の之れを用ゆれば諸症の發生を豫防して益强壯となる故に衛生家は之れを日常の飲料となせり我蜂印香竄葡萄酒が佛蘭西萬國大博覽會より得たる金賞牌西班牙萬國大博覽會より得たる銅賞牌は其光輝を世界萬邦に放てり爲めに近來舶來葡萄酒の我蜂印香竄葡萄酒に壓倒せられたる事著大なり以て本品の卓絶比類なきを知るに足る可し我蜂印香竄葡萄酒の蜂の商標に紛はしき羽虫の印を附して香竄葡萄酒と云へる品質不良の類似品あり御購求の際は蜂の商標と賣捌元近藤利兵衛とを確かに認識あらんことを希ふ

賣捌元

東京市日本橋區本町二丁目九番地

洋酒問屋　近藤利兵衛

（電話四四二番）

賣捌所は全國到る處にあり御最寄にて御購求を乞ふ

福音新報

●本月十五日發兌は第五卷の第一號なり。記事論説等總べて此の號より更に光彩燦然たるを見ん。所載の要目を擧ぐれば

●種々なる題目の下に**基督教主義の倫理**に關する文章續出して世道を益するもの少からず。

●**信仰の友**は求道の士之を讀みて發明する所あるべく、信徒たるものは之に依りて靜思建德の助けを獲へし。

●**家庭**は實に其名の如く家庭の好伴侶なり。

●若し夫れ奇思湧くか如く詩歌文章玉の如く讀者をして神氣快然たらしむるものは**雜錄**なり。

●其他**説苑**に**社説**に斬新にして謹嚴なる眞實にして虛浮ならざる意見躍如たり

●**教報**欄内には帝國の基督教に關する報知東西南北より來る。

●**外事、批評、雜纂**等皆な社員の輕々しくせざる所なり。

●福音新報は配布の數に於ても、紙面の性質に於ても近來大いなる進歩を爲せり。

●傳道のため、基督教研究のため、家庭改良のため、建德篤信のために最も必要なるもの吾か福音新報なり。

定價(郵税共)一年一圓四十錢。半年七十三錢。三月三十八錢。

東京麹町區四番町四番地
發行所 **福音新報社**

基督教新誌

第九號目録

社説
日本傳道之第二期
論説
支那の回々教 赤石賴一
善惡の意義 政田辰次
寄書
湯淺吉郎氏の辯解を讀む 碎軟生
教界先覺論 G. M.
雜錄
比翼塚(詩) 暗野宇四郎
波上月影(詩) 愛櫻生
今宵 蕭條居主人
講壇
社會之暗黑面 瑞溪生譯
勝利之力
觀察
將に來らんとする者は○教役者の報酬○甘酒說教○曹洞宗と聖教會と○代價と價値と○不平の用○丁汝昌自殺
●●●啞兒噴語 親と子○眞衣ほしや○四百州草木○主よ如何に見そなし玉ふや○十人の義人尚一を欠く○啞兒嘆
新刊
批評 紹介

毎月五日發兌一冊三錢

東京市麹町區下六番町十三番地
基督教新誌社

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	定價	郵稅
（再版）小公子	若松賤子譯	一册廿八錢	郵稅四錢
（六版）百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
（信孝神父）腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
（猫さき）猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一册十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可滅	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

書名	著者	定價	郵稅
戲曲 桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	二錢	郵稅一錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛）

日本の婦人（一冊正價五十錢、郵稅六錢）

女子の本分（一冊定價廿五錢、郵稅六錢）

透谷集（一冊定價三十八錢、郵稅六錢）

書信は總べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候

巖本善治

女學雜誌定價表

前金	一册定價 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年三月廿四日印刷
明治廿八年三月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式合社秀英舍第一工塲（電話十九番）

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅四錢
（六版）百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
（信神孝父）腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
（猫さき）猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可滅	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎・布川孫市兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎・植木枝盛兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

（戲曲）桂五郎	阿波鳴門左衞門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	二錢	郵稅一錢

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛）
日本の婦人（一冊正價五十錢、郵稅六錢）
女子の本分（一冊定價廿五錢、郵稅六錢）
透谷集（一冊定價三十八錢、郵稅六錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候　巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊　金拾錢 一年前金　金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年三月廿四日印刷
明治廿八年三月廿五日發行
發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式合社秀英舍第一工塲（電話十九番）